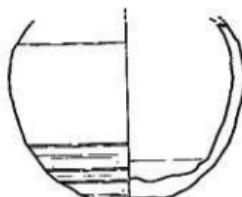
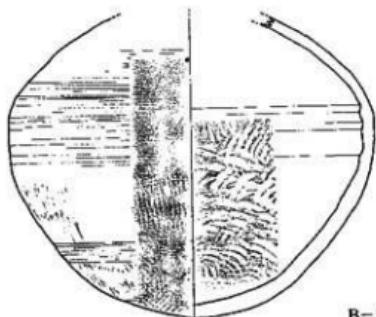
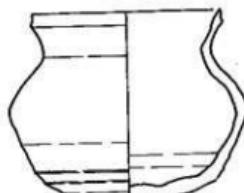
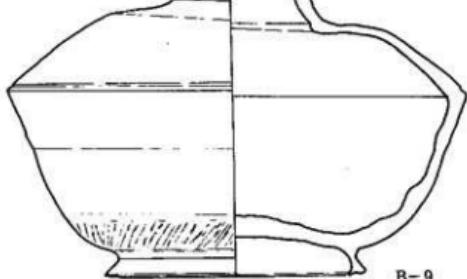
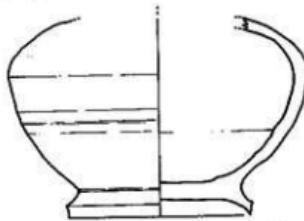
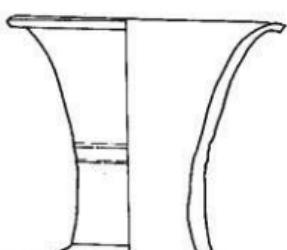
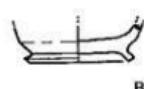
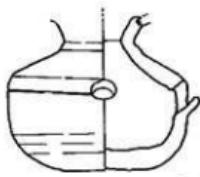
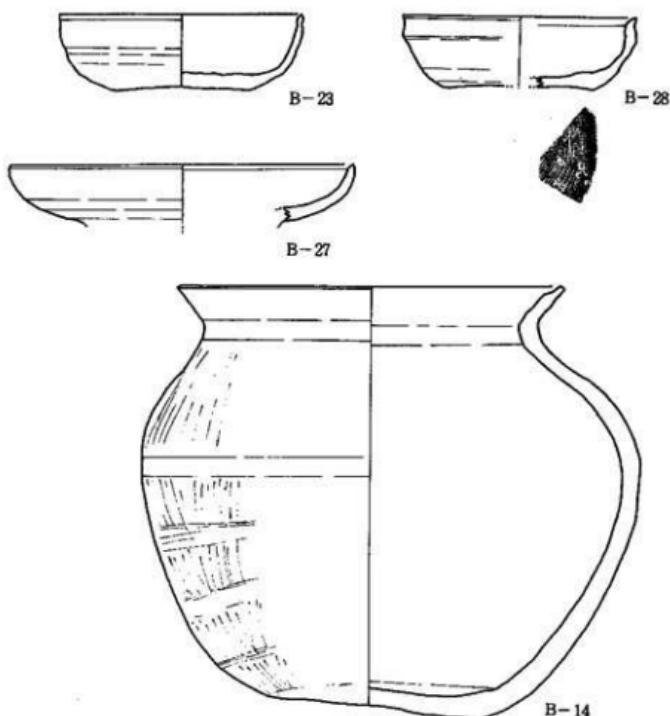


第18図 イガラビ 2号墳出土遺物実測図(1) 1/4



第19図 イガラビ2号墳出土遺物実測図(2) 1/2

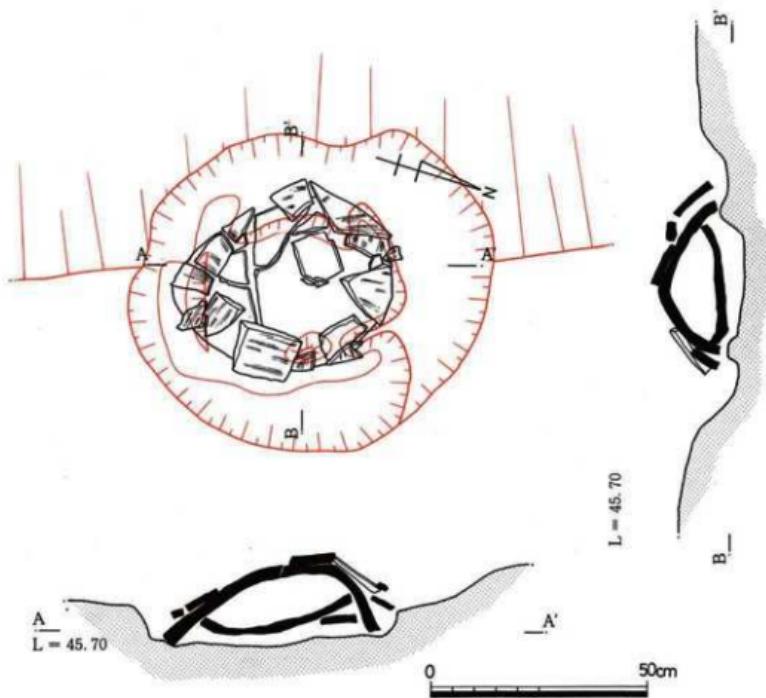


第20図 イガラビ 2号墳出土遺物実測図(3) 1/6

周溝内の遺物は4個体で、いずれも溝内の東側で小破片となって散乱していたものである。B-14は口径20.4cm、器高22.6cmの壺である。全体に黒灰色を呈しており、口縁部は波をうって歪んでいる。B-23・28は底外面に糸切り痕のある平底の壺である。口径12.6cm、器高4.0cmを計る。また、B-27は高壺の壺部片と思われる。

本古墳の周辺では陶棺片及び埴片は検出されなかった。

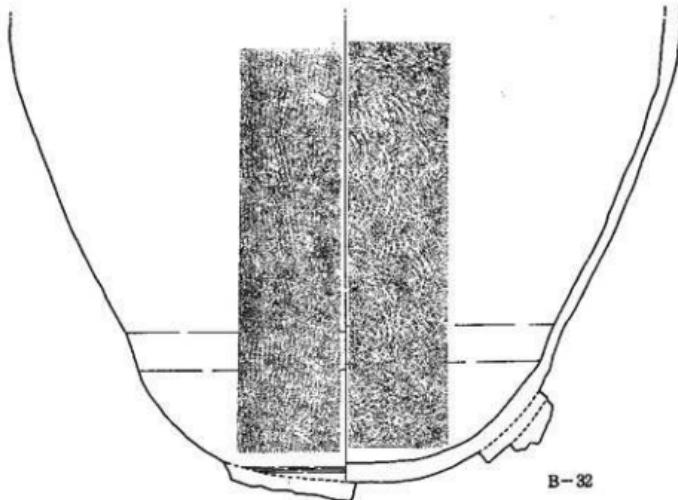
その他の遺構 2号墳の北側周溝の外周上端に東西73cm、南北82cm、深さ11cmの小型土壙が検出された。内部には胴部最大径が推定約59cmの大甕（B-32）の下半部が底部を上にした状態で検出された。大甕の外面には他の2片の甕片が内面を外側にして溶着していた。



第21図 イガラビ2号墳北東部小土壙実測図

更にその甕片には蒸壁の一部も付着していた。これらは他の甕片焼成時の焼台として使用したものと推測される。

この土壙はこうした出土状況からみて、2号墳に伴う何等かの埋葬施設ではないかと思われるが、詳細は不明である。



第22図 イガラビ2号墳北東部小土壤内大甕実測図 1/2

第2表 イガラビ2号墳出土遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
B-01	3区	环蓋(輪状つまみ)	13.6	2.7	受部のあるもの。
B-02	3区	环蓋	10.2	4.1	外面施切り未調査。身では施りが悪い。
B-03	3区	环身	9.0	3.4	立上がり0.2、角度48.0、上外方。
B-04	3区	埴	7.3	8.5	口径が大きく平底に近い。
B-05	3区	埴			平底に近い。
B-06	3区	环蓋	10.3	3.9	B-07とセットで出土したもの。
B-07	3区	环身	9.0	3.4	立上がり0.4、角度53.5、上外方。
B-08	3区	高埴	12.8	9.55	
B-09	3区	高台付瓦瓶	14.8	26.7	
B-10	3区	高台付环	14.8	4.15	
B-11	3区	高台付环	9.6	4.5	
B-12	3区	环蓋(輪状つまみ)	17.1	3.4	受部がある。
B-13	3区	高台付环	14.0	4.8	
B-14	1区周溝内	壺	20.4	22.6	
B-15	3区	环身	10.8	3.6	受部がない単純なもの。底部が平らに近い。

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
B-16	3区	环蓋	13.0	4.8	口径も大きく器高も高い。
B-17	3区	高环	9.0		环部片
B-18	4区	短頸壺	9.8	10.0	
B-19	2区	高台付环			
B-20	3区	环蓋	12.0	2.7	輪状つまみに近い形。
B-21	3区	高台付長頸壺			
B-22	石室に近い狭道部	环蓋	10.8	3.4	短頸壺の蓋。外面の削りが丁寧である。
B-23	周溝内遺物	平底环	12.6	4.0	糸切り痕あり。
B-24	3区	环身	14.6		立上がり0.6、角度46.0、上外方。
B-25	2・3区石室正面敷布	环盃(輪状つまみ)			つまみ部分のみ。
B-26	3区	壺			
B-27	1区周溝内	高台付环	18.0		口縁部のみ。
B-28	1区周溝内黒褐色土	平底环	12.4	3.8	糸切り痕あり。
B-29	墳丘盛土中	环身	11.2	3.7	立上がり0.6、角度40.5、上外方。
B-30	2・3区南斜面下段褐色土	高台付長頸壺			
B-31	3区・南斜面	平底壺			
B-32	1区周溝内	壺			底部片のみ。

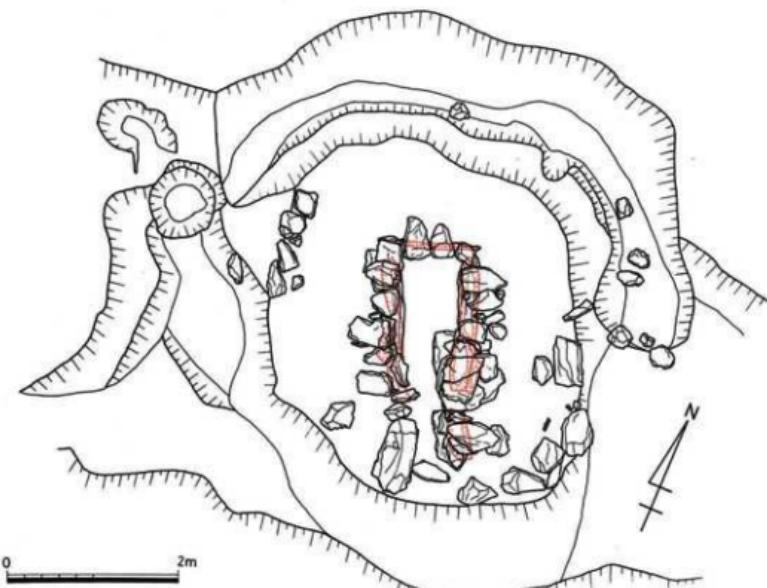
4. イガラビ 3号墳

位置と現状 イガラビ 2号墳の南約15mに位置し、標高は墳丘基底部で38.8mを計る。1号墳と2号墳の南斜面下方には、後世に作られた幅1.5m程の山道がめぐらしており、当初は本古墳の存在には気が付かず、2号墳の残りの石材が単に堆積したものと考えていた。南斜面の調査区域は、この山道を境として古墳群（1・2号墳）と関連する遺物散布地の2地区に大きく分割していた。1・2号墳の遺構検出後、南斜面の調査に着手し、山道の一部を除去したところ、表土下第2層目に本古墳の奥壁の小口積みの石組みが現れ、古墳と確認した。このため、石空主軸の延長線上に新たに畦を設定し、それと直交する畦は山道の南側断面をもってそれにかえることにした。そして全面にわたって表土及び堆積土を除去し、残存する墳丘面と周溝を露出させ、墳丘の平面形を追求していく方法をとった。

墳丘 墳丘は東西4.7m、南北4.1mの略方形を呈し、高さは墳丘基底部より現存高0.9mを計る。本古墳の墳丘の多くの部分と石室の天井石は、山道をつくる時に削平されてしまったようであるが、墳丘は北斜面を削り取り、これを南側に埋めて地山面を整形し基底部としている。盛土は腰石の外側に地山を掘削したと思われる明褐色粘質土を詰めて固め、その上に順次暗褐色土、褐色土等を積み上げている。周溝は、地山を馬蹄形状に掘削しており、その幅は1.5m、深さは0.6mを計る。周溝の内側には外護列石をめぐらしていた（東側と西北の一部に残存）。

主体部 主体部は南南西に開口した小規模の横穴式石室で、主軸線はN22.5°Wである。玄室は、幅0.7m、奥行き1.7mの長方形を呈する。奥壁、側壁は高さにして床面より60～80cmまで遺存している。腰石は、奥壁1枚、側壁は各2枚づつを据える。石室の構築方法は、まず左に 1.35×0.5 m、厚さ0.3m、右側で 1.1×0.5 m、厚さ0.2mの2枚の側石となる腰石を置く。次に 1.5×0.5 m、厚さ0.1mの奥石を据え、それより上に小振りの石を小口積みにしている。東壁入口側の腰石は玄室内に倒れ込んでいた。袖部には左側にのみ板石を立てて袖石としている。袖幅は15cmである。床面には厚さ2～3cm、大きさ15cm前後の扁平な石を敷く。羨道部は前半部が崩れて不明確であるが、遺存長1m、幅50cmを計る。袖石より80cm入口側に掘石らしきものが遺存している。

石室を構築するための掘り方は、墳丘基盤の中心部のさしわたし2m四方の範囲を、北



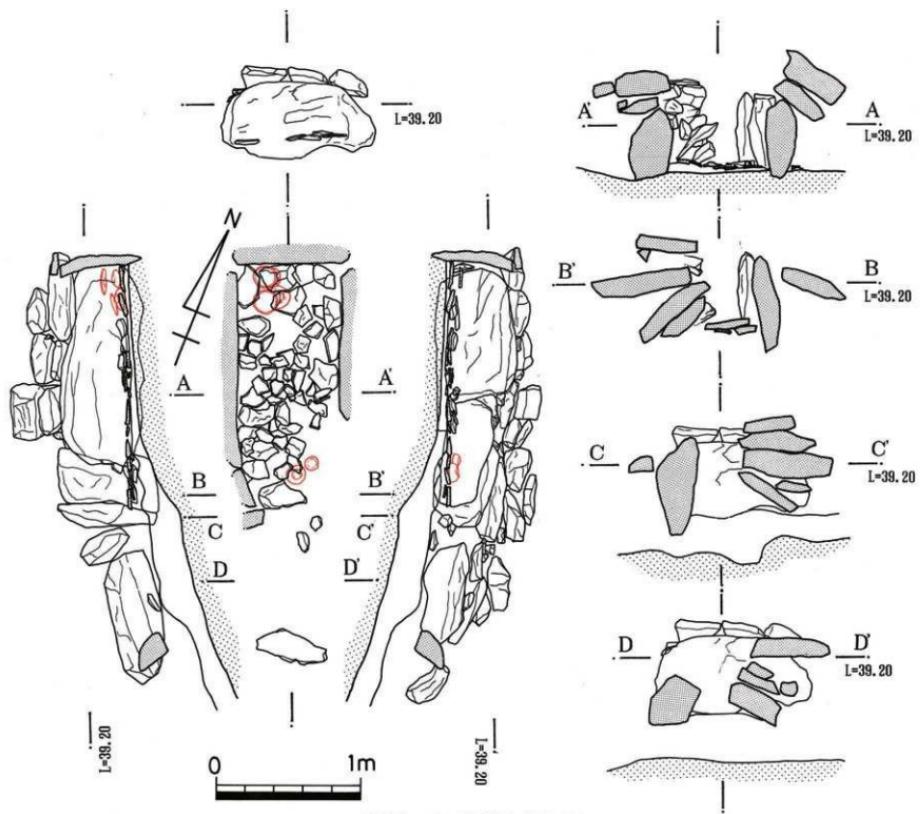
第23図 イガラビ3号墳調査成果図

側で約20cm掘り込んで南側と高さをあわせ、一段と低い平坦面をつくっている。そしてその中ほどに、玄室の腰石を立て2~6cmの厚みに暗褐色土と明褐色土を敷き、その上に厚さ2~3cmで15cm大の偏平な石を敷いて床面としている。羨道に当たる部分は、地山の上に明褐色土、褐色土等を盛って平坦面をつくり、その上に構築している。

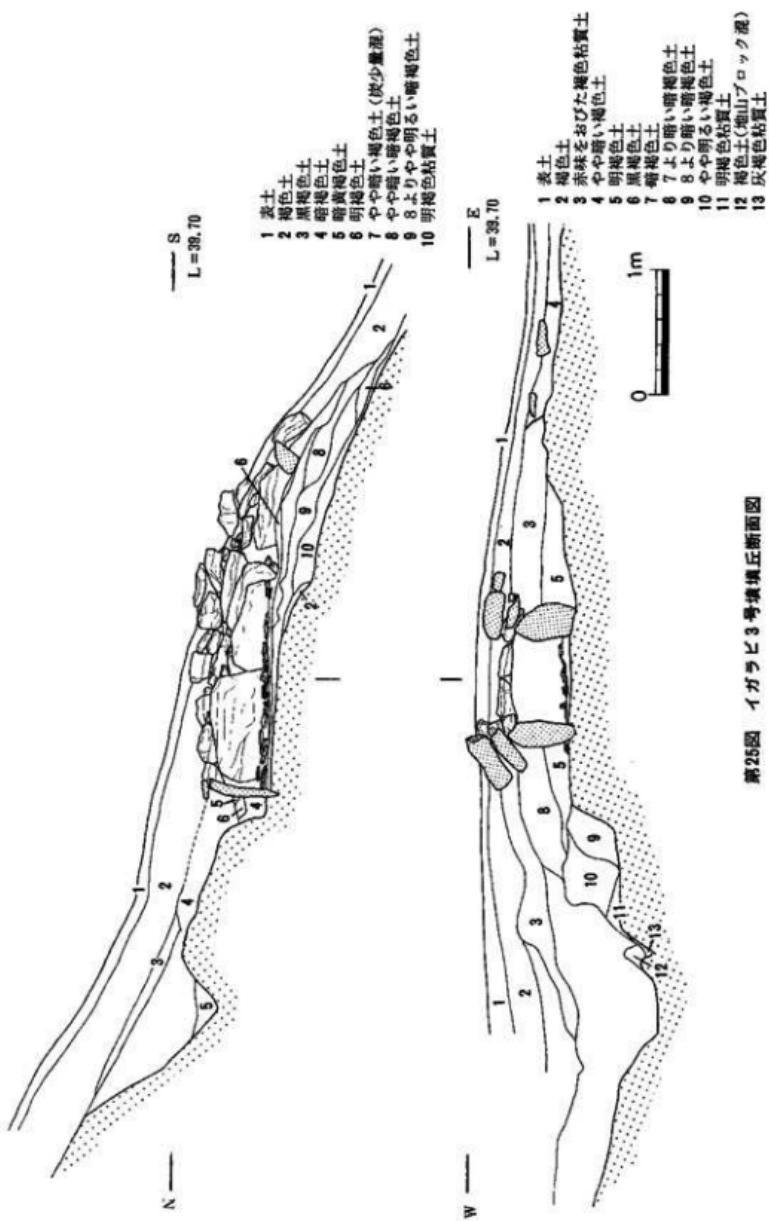
遺物 出土遺物は、玄室内より須恵器6点、窯壁塊6個が床面直上から15cmまでの間で出土した。

杯蓋 C-1は輪状つまみの口縁端部が下方に屈曲した蓋である。左奥のすみから床面より5cm上で出土した。口径15cm、器高2.1cm。C-2は輪状つまみのかえり付の蓋である。左奥壁ぎわで床面より10cm上から出土した。口径14.6cm、器高3.5cm。かえりは口縁端部を結ぶ線よりわずかに上にくる。

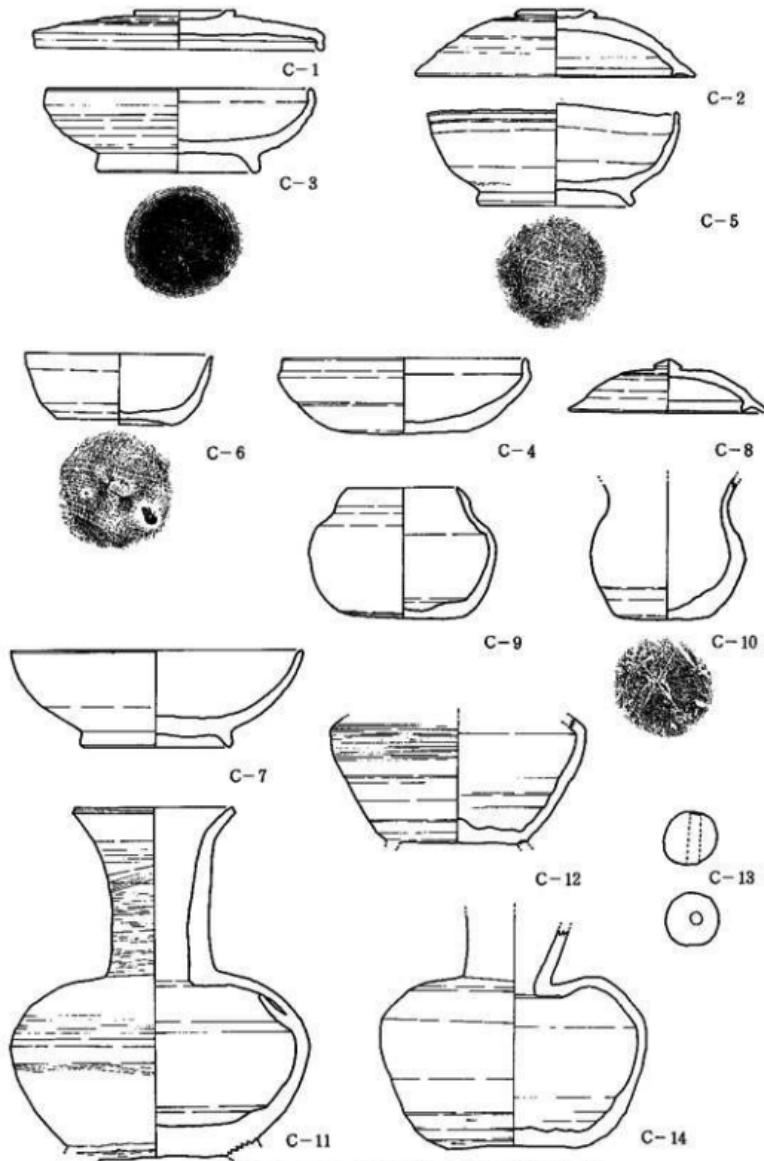
高台付杯 C-3は床面直上でC-1の蓋の下からふせた状態で出土した。口径13.8cm、器高4.4cm。体部は内彎したのち立ち上がり底部に静止糸切り痕を残す。C-5は玄室入口近くの床面からふせた状態で出土した。口径12.8cm、器高4.8~5.4cmで、口縁端部に焼



第24図 イガラビ3号墳主体部実測図



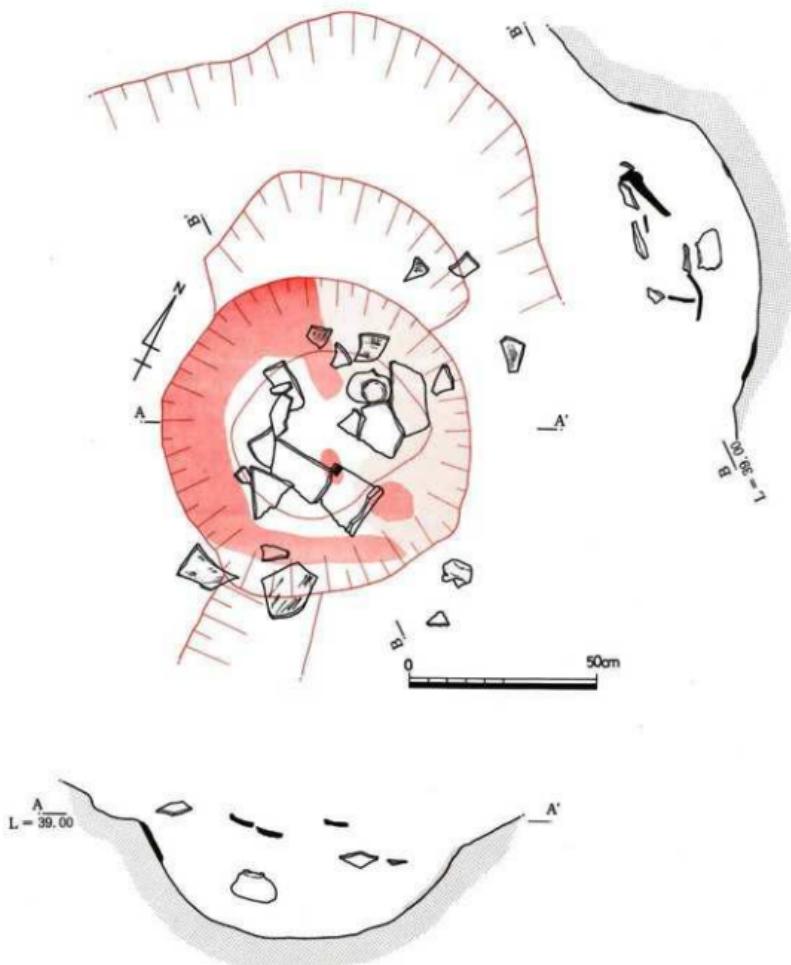
第25図 イガラビ3号墳埴丘断面図



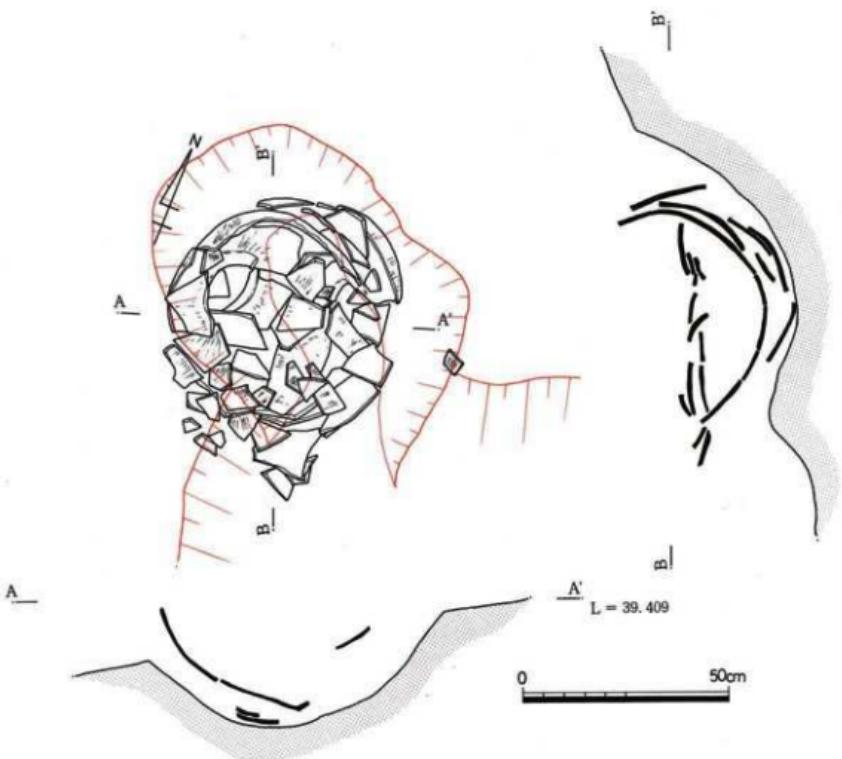
第26図 イガラビ 3号墳出土遺物実測図(1) 1/2

きひずみがある。底部は静止糸切りで範記号がある。

坏 C-4は口縁部のくびれた坏である。左奥壁ぎわではば床面から出土した。口径12.6cm, 器高4.0cm。回転範切りである。C-6は底部が上底になった小振りの坏である。倒れ込んだ右側壁の下の床面より出土した。口径9.8cm, 器高3.7cm。切り離しは静止糸切り



第27図 イガラビ3号墳西側周溝内焼土壙実測図



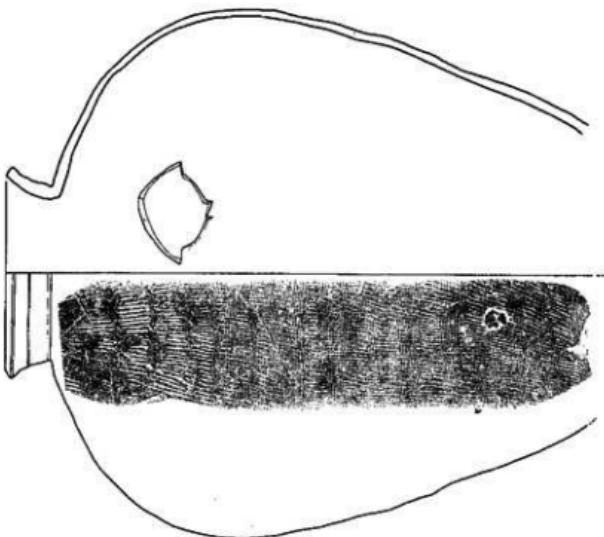
第28図 イガラビ3号墳西北部小土壙実測図

で未調整である。窯壁塊は右奥壁近くで床面から10cmまでの間で6個出土した。

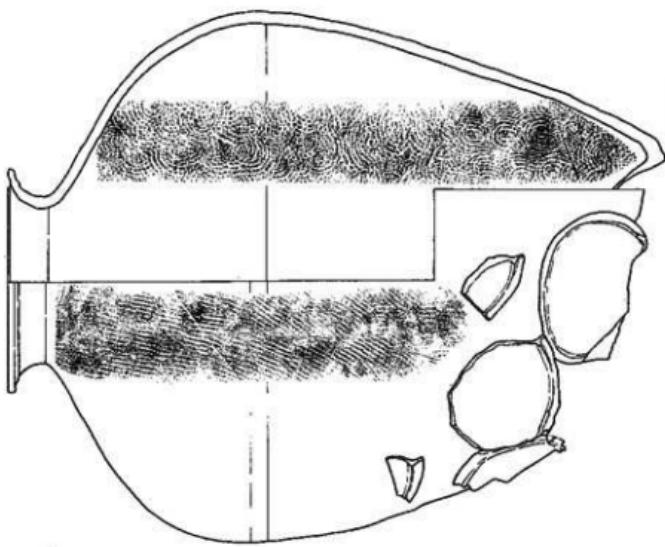
羨道部からは須恵器の高台付壺（C-7）が1点出土した。推定口径15.2cm、現存高2.9cm。軟質の脆いものである。

周溝からは蓋（C-8）、短頸壺（C-9）、小型壺（C-10）、長頸壺（C-11・14）、土玉（C-13）、焼土壙からは高台付の長頸壺（C-12）が出土している。C-12は体部から肩部にかけて残存。体底部径7.5cm、現存高6.5cm。底部回転笠切り、体部3分の2に回転笠削り、体部から肩部にかけて回転カキ目を施す。C-11は高台付の長頸壺、C-14は平底の長頸壺である。

C-16



C-15



第29圖 イガラビ3号竪西北部小土塚内出土遺物実測図 1/2

その他の遺構 西側周溝内の溝底より一層上で80×85cm、深さ20cmの焼土壙を検出した。周壁は青緑色又は赤色に焼締り、上層の黒色土中層には炭焼土まじりの暗褐色土、下層には炭土が堆積していた。遺物は上層で焼片、中層で高台付の蓋の体部が出土した。

周溝の西北外方の地山面で掘り据えられたと思われる大甕を検出した。甕は2個体ある。1個体はやや斜めに据えられ、口縁部から肩部にかけて割れて中に落ち込んでいた。もう一個体分の破片は、掘り方の底と側面及びその周辺で出土した。掘り方は、上端で60×80cm、下端で20×25cm、深さ25cmを計る。

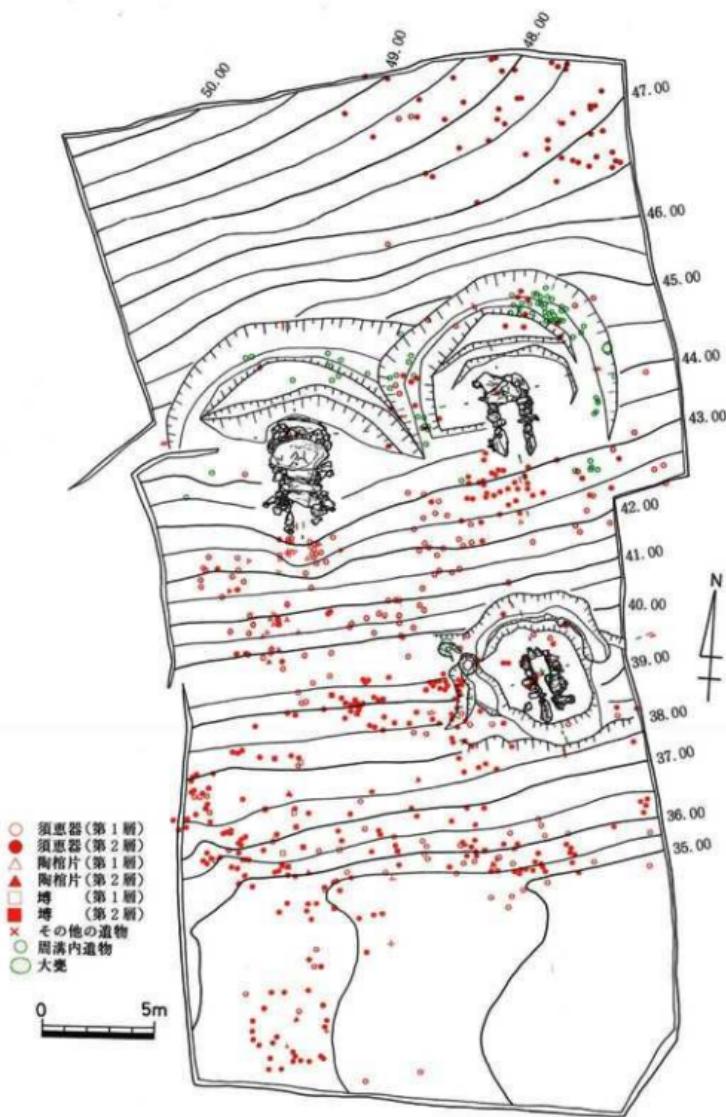
周溝西外方から出土した大甕は、C-16とC-15である。C-16は内側に据えられていたもので、口径18.8cm、器高52.0cm、体部最大径46.8cm。底部は穿孔されて焼成されている。肩部から体部にかけて緑色の自然釉のたれた美しいものである。C-15は外側になっていたものである。推定口径19.2cm、器高57.4cm、体部最大径46.1cm、底径8.3×19.7cm以上の範囲で穿孔後焼成。体部下半にかえりのついた輪状つまみの蓋が6個体はりついていた。

追葬について イガラビ3号墳の玄室内には輪状つまみの蓋と、静止糸切り痕のある平底の杯が同時に見られることから、少なくとも1回は追葬が行われたのではないかと考えられる。周溝西外方には、大甕が掘り据えられていたが、その掘り方に詰められていた1個体の甕には輪状つまみのかえり付の蓋が貼付けられていた。一方、周溝から検出した焼土壙は溝底よりかなり浮いているため、本古墳築造時よりは時間的に経過した段階（例えば追葬時等）での祭祀に関連した遺構と考えたい。

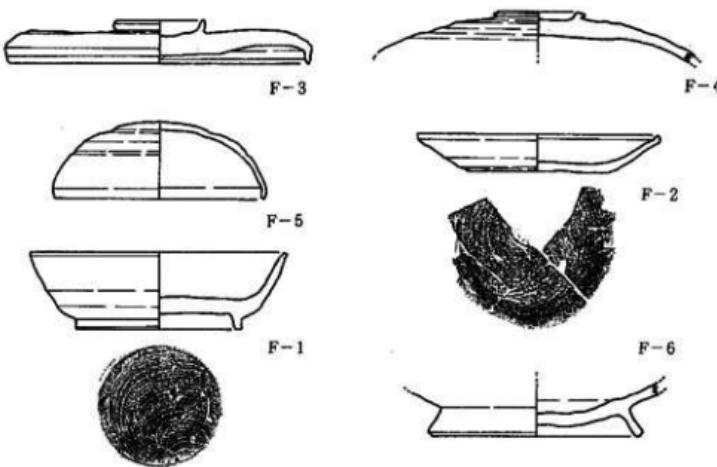
5. イガラビ1～3号墳周辺で出土した遺物について

イガラビ1～3号墳のある丘陵南斜面全域にわたり遺物の散布が認められている（第30図）。多くは細片であるが、このうちの実測が可能であったものを図示する。

イガラビ1・2号墳の北側斜面から出土したものはF-1～F-6までである。F-5はイガラビ1号墳の杯蓋1類と同様で口径10.8cm、器高4.0cmを計る。F-2は回転糸切り痕を有する、かわらけ状の浅い平底の杯である。口径12.6cm、器高2.0cm。F-1は高台付杯であるが、この底部外面にも回転糸切り痕が残っている。F-6は台付長頸壺の底



第30図 イガラビ1～3号墳遺物出土状況図

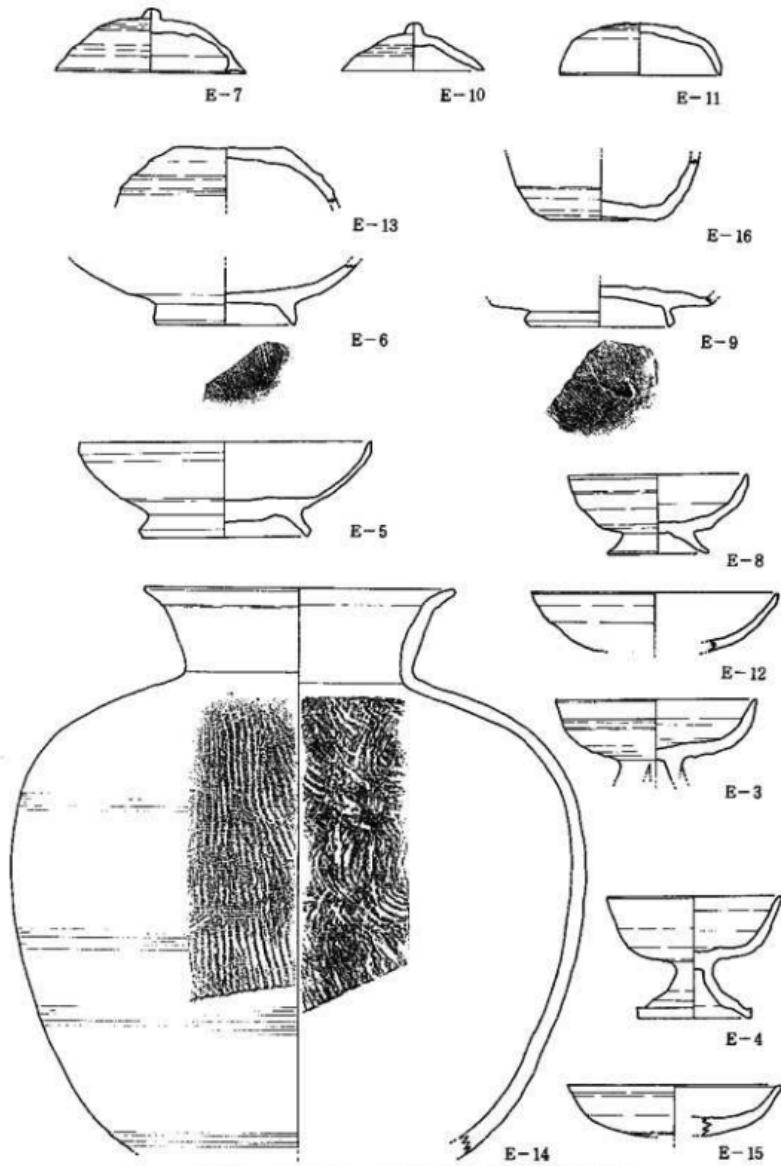


第31図 イガラビ1～3号墳北斜面出土遺物実測図 1/3

部と見られる。

E-3～E-16までは1・2号墳の下段を通っている山道南側から出土したものである。E-7・10は乳頭状のつまみを有する杯蓋で、E-7は口径10.0cm、E-10は口径7.6cmの小型のものである。E-11は口縁部が内傾しながら高く立ち上がり天井部は比較的平坦に近いもので、外面は箝削りにより調整するものである。壺類の蓋と思われる。口径8.4cm、器高2.7cm。E-4・3・15・12はいずれも高杯と考えられる。E-4は口径9.2cm、器高6.4cmの小型である。E-3は三方に透かしが穿たれている。E-8は低脚杯で脚部杯部とも回転ナデ、杯部内底面は静止ナデにより調整する。口径10.4cm、器高5.2cmの小型のものである。高台付杯は3点(E-6・5・9)ある。E-5は口径15.2cm、器高5.0cmを計る。高台の端部はいずれも丸く、E-9・6は底部外面に静止糸切り痕を有している。E-14は壺の口縁部から胸部にかけての破片で、口径16.4cmを計る。

これらの遺物の出土層位は表土から10cm内外までに集中している。南斜面の遺物の中に小型の製品も見られるので、位置的にみても古墳に供獻されていたものではないかという仮定も考えられるが、1・2号墳よりもさらに上方の北斜面から出土した遺物については、それらが古墳群の祭祀とどのような関係にあったのか不明である。



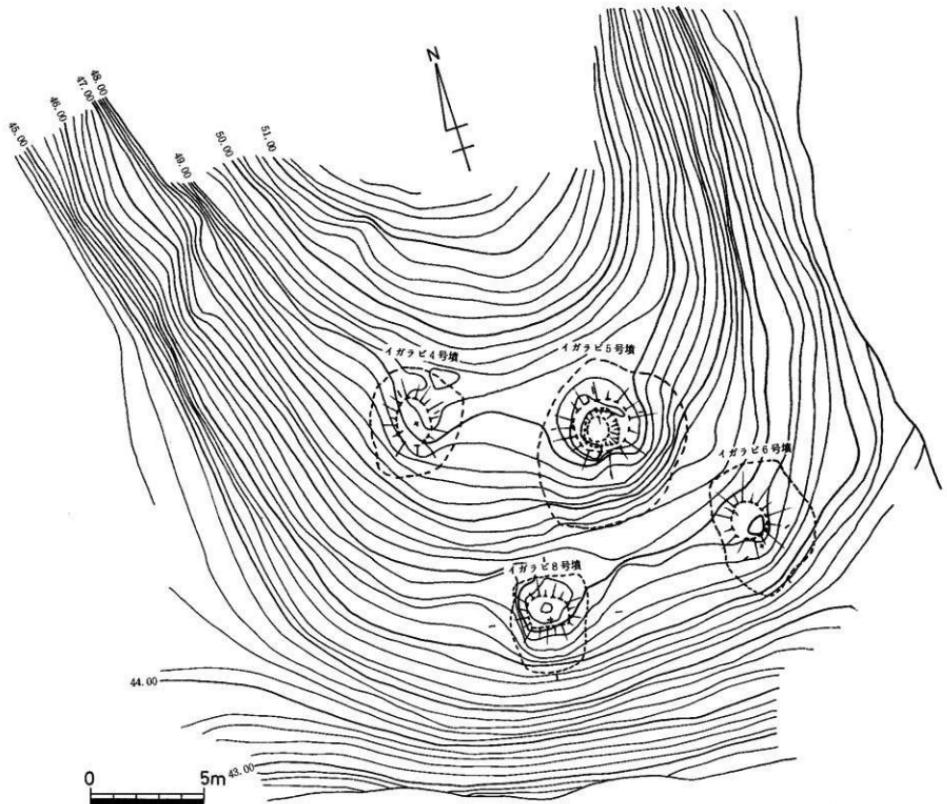
第32図 イガラビ1～3号墳南斜面出土遺物実測図 1/2

第3表 イガラビ3号墳出土遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
C-01	玄室床面	坏蓋(輪状つまみ)	15.0	2.1	受部のないもの。
C-02	玄室床面	坏蓋(輪状つまみ)	14.6	3.5	受部のあるもの。
C-03	玄室床面	高台付坏	13.8	4.4	停止系切り痕あり。
C-04	玄室床面	坏身	12.6	4.0	端部がくびれるもの。
C-05	玄室床面	高台付坏	12.8	4.8	停止系切り痕。竪記号。
C-06	玄室床面	平底坏	9.8	3.7	停止系切り痕。
C-07	文室側石の石室寄り	高台付坏	15.2	5.1	
C-08	4区周溝内やや暗い褐色土	坏蓋(擬宝珠つまみ)	10.4	2.8	受部のあるもの。
C-09	4区周溝内やや暗い褐色土	短頸壺	5.6	6.9	
C-10	4区周溝内やや暗い褐色土	小壺壺			竪記号。
C-11	3区周溝内やや暗い褐色土	高台付長頸壺	8.2		
C-12	4区焼けた土壙内暗褐色土上	高台付長頸壺			
C-13	3区周溝内	土玉	2.8	2.8	
C-14	4区周溝内暗褐色土	長頸壺			
C-15	4区西外方	壺	19.2	57.4	
C-16	4区西外方	壺	18.8	52.0	

第4表 イガラビ1~3号墳北斜面・南斜面出土遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
F-01	北斜面	高台付坏	13.4	4.05	円転系切り痕あり。
F-02	北斜面	平底坏	12.6	2.0	円転系切り痕あり。
F-03	北斜面	坏蓋(輪状つまみ)	15.6	2.3	受部のないもの。
F-04	北斜面	坏蓋(輪状つまみ)			端部なく不明。
F-05	2号北斜面	坏蓋	10.8	4.0	短頸壺の蓋と思われる。
F-06	北斜面	高台付長頸壺			
E-03	南斜面(ビザ下)褐色土	高坏	10.6		
E-04	南斜面(ビザ下)褐色土	高坏	9.2	6.4	
E-05	褐色土(表土下)中	高台付坏	15.2	5.0	
E-06	1号2号斜面褐色土	高台付坏			
E-07	1号2号斜面褐色土	坏蓋(擬宝珠つまみ)	10.0	3.35	乳頭状に近い。
E-08	褐色土(表土下)中	低頸坏	10.4	4.2	
E-09	南斜面	高台付坏			停止系切り痕あり。
E-10	1・2号墳南斜面	坏蓋(擬宝珠つまみ)			端部不明。乳頭状。E-07に似る。
E-11	1・2号墳南斜面	坏蓋	8.4	2.7	
E-12	1・2号墳南斜面	高坏	13.0		跡部片のみ。
E-13	1・2号墳南斜面	坏蓋			核を下部の沈線で浮きだすもの。
E-14	1・2号墳南斜面	壺	16.4		
E-15	南斜面壺群	高坏	11.2		
E-16	1号3区下南斜面褐色土	平底坏			停止系切り痕。



第33図 イガラビ4～8号墳平面測量図

6. イガラビ 4号墳

位置と現状 イガラビ 4号墳は、1～3号墳の所在する丘陵地より南に約30m奥の緩斜面に位置する古墳である。

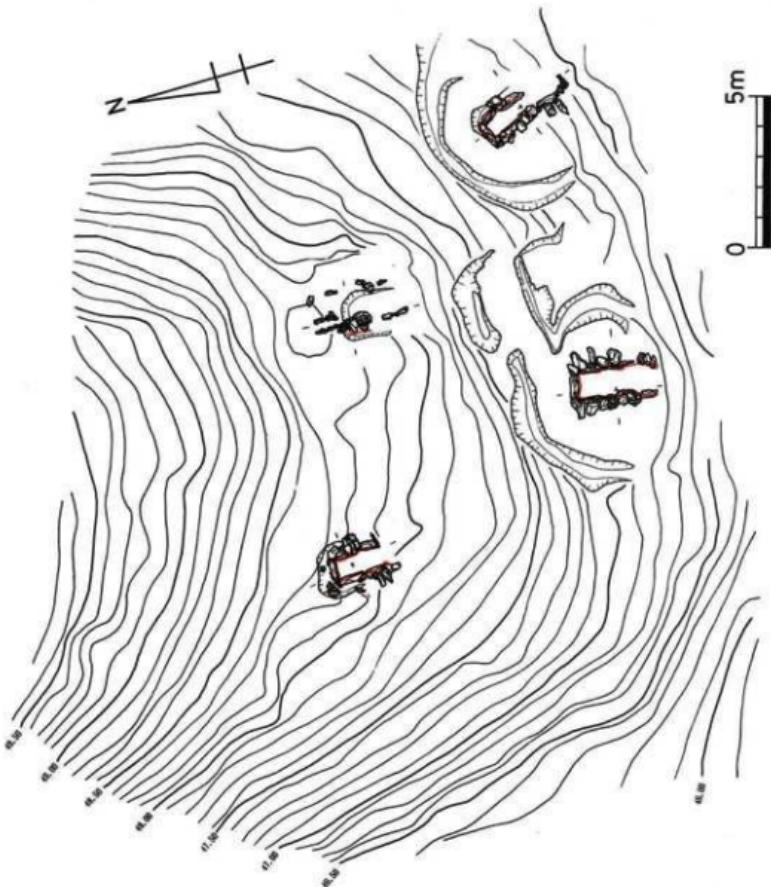
墳丘の高さは分布調査時点では約0.5mで、ほとんどの盛土が流失していると思われた。墳丘中央には、南北に幅0.5m程度の石列が露出していたので、当初はこれらが主体部となる組合せの石棺であろうと考えられた。周溝等の外部施設も表面的には何も認められなかった。

墳丘 調査の結果、墳丘の規模は南北長4.95m、東西長4.50m、高さ0.30mを計るもので墳形は不明であった。墳丘を形成する盛土は、単一の褐色土層で、地山面から最大17cmを計る。北側の奥石の外面にわずかに土層の変化が見られたが、これは石室側石を安定させる際の掘り方と考えられ、何層にもわたって盛り上げた痕跡はうかがえない。周溝、土壇等の外部施設もなく、比較的短期間で構築されたものと考えられる。

主体部 墳丘中央の石室は、南北長1.95m、東西幅1.0mの長方形を呈するもので、長軸の左右に各2枚、北側の奥壁に1枚の長さ0.8～1m、高さ0.5m、幅0.1～0.2mの偏平な大石をもってこれに当てる。南側の側石は存在せず、長さ0.5m、高さ0.15m、幅5cmの細長い平石を配してあるのみであった。これは組み合せの石棺とした場合は疑問な点であったが、後の整理作業の中で横穴式石室の樋石であると考えるに至った。

側石は、外面及び内面に、約10cmほどの石を置いて安定させた上で、石室内側を地山面より10～15cmにわたって土砂を盛り、この上に小さなもので10cm、大きなもので30～50cm程度の偏平な石を敷きつめて床面としている。従って、これら側石は地山面に対しては5～10cm掘り込まれた程度である。

石室の上面には、側石に対して直角に幅20cm、長さ50cm程度の平石が置かれてあり、築成時は側石上面のすべてに放射状に配置されていたものと考えられる。組合せの石棺を考えた場合、この配石の意味は不明である。しかしこの場合も、横穴式石室と考えれば、これらの石は小口積みの石組みであったと推察される。また床面上には床石以外の石材は認められなかったので、側石上に少なくとも一段以上の積み石を施したのち、木製の蓋をしたか、直接盛土したものと思われる。玄室に続く遺構は、石材及び掘り方等全く検出さ



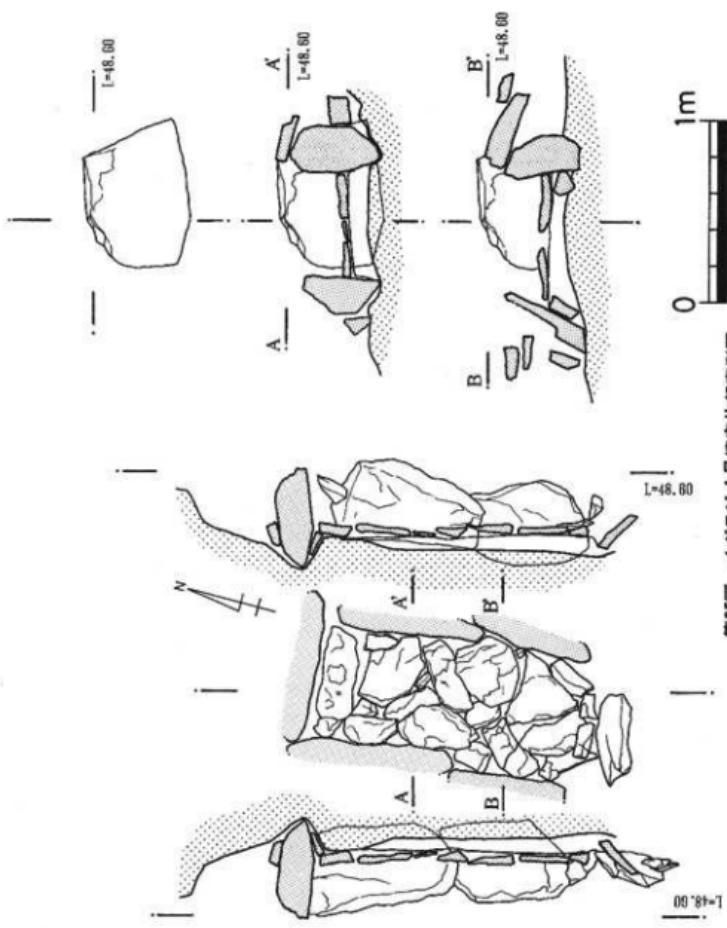
第34図 イガラビ4～8号墳成図

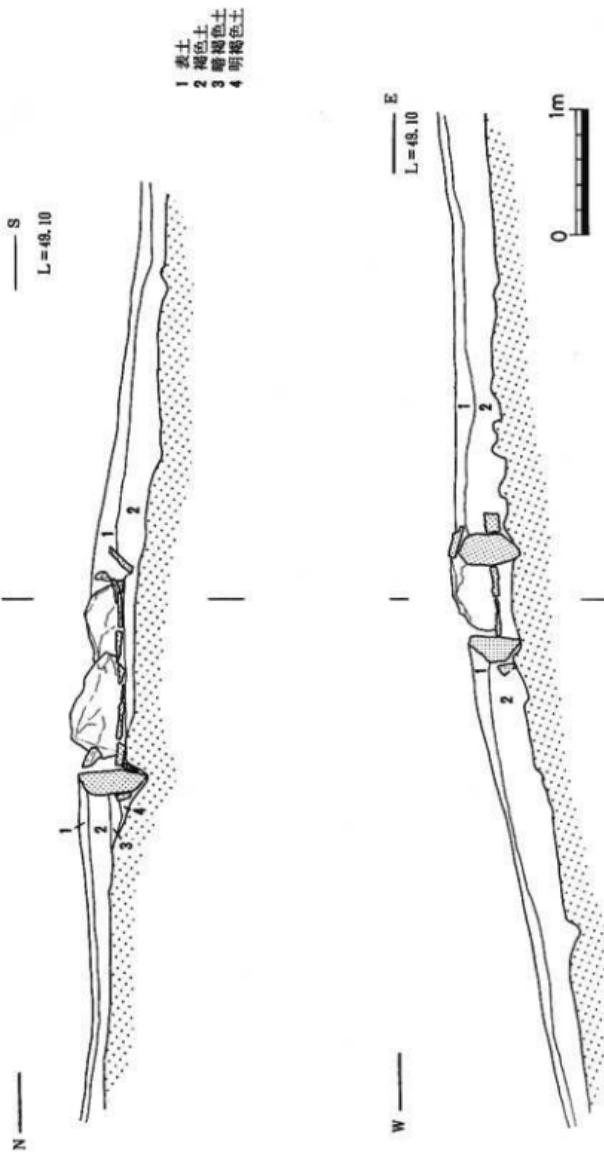
れなかったので、羨道部は当初からなかったものと考えられる。

出土遺物 石室内部には遺物は全く遺存していなかった。4号墳と5号墳の中央付近にはぼ完形の翫（D-01）と、平底の回転糸切り痕のある杯（D-02）が検出されたが、いずれの古墳の出土遺物とも確定はできなかった。

そのほか、墳丘盛土を除去する際に高台付杯を主体とする多くの須恵器の小片が検出されたが、完形となるものはなかった。これらの遺物については後述する。

第35図 イガラビ 4号標主体部実測図





第36図 イガラビ4号壙塚丘断面図

7. イガラビ 5号墳

位置と現状 5号墳は、4号墳より東へ約8mを隔てた丘陵緩斜面に位置する古墳である。分布調査の時点では、標高は墳頂部で48.3m、墳丘の規模は東西長7.4m、南北長6.5m、墳丘の高さ0.9mを計った。

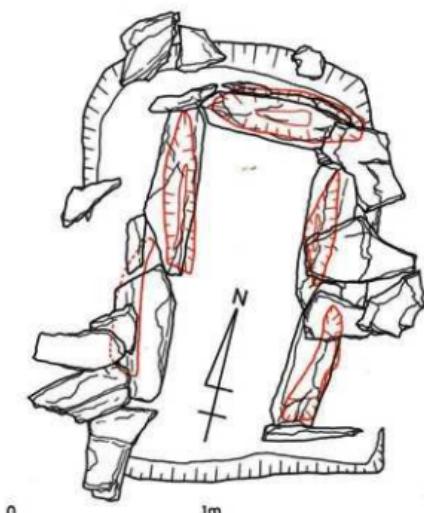
6・7・8号墳とは、南側に7~9mを隔てて隣接し、高低差1~1.3mを計る。墳頂部に 1.5×1.7 m、深さ15~20cmの落込みがあった他は、石材は露出していないかった。

墳丘 調査終了後の地山の形状から見ると、東西長4.5m、南北長4.0m、高さ0.3mを計るもので、墳形は不明であった。周辺には大小の石が散乱してはいたが、墳丘中央部にはほぼ南北に長軸を向いた小型の横穴式石室の一部が遺

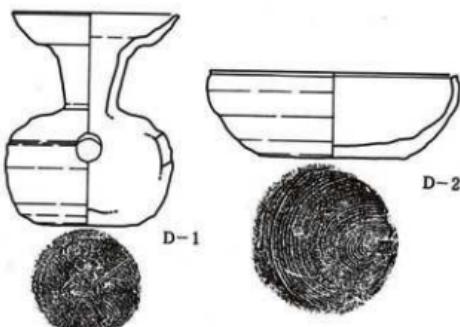
存していた。北側の平坦部分にU字状の周溝の跡がうかがえるが、判然としなかった。

盛土は、表土以下大きく4層に分けることが出来たが、地山の直上である4層目は黄褐色~暗黄褐色の粘質の強い土で堅く締まっていたので、石室の構築に際して意図的に形成されたものと考えている。

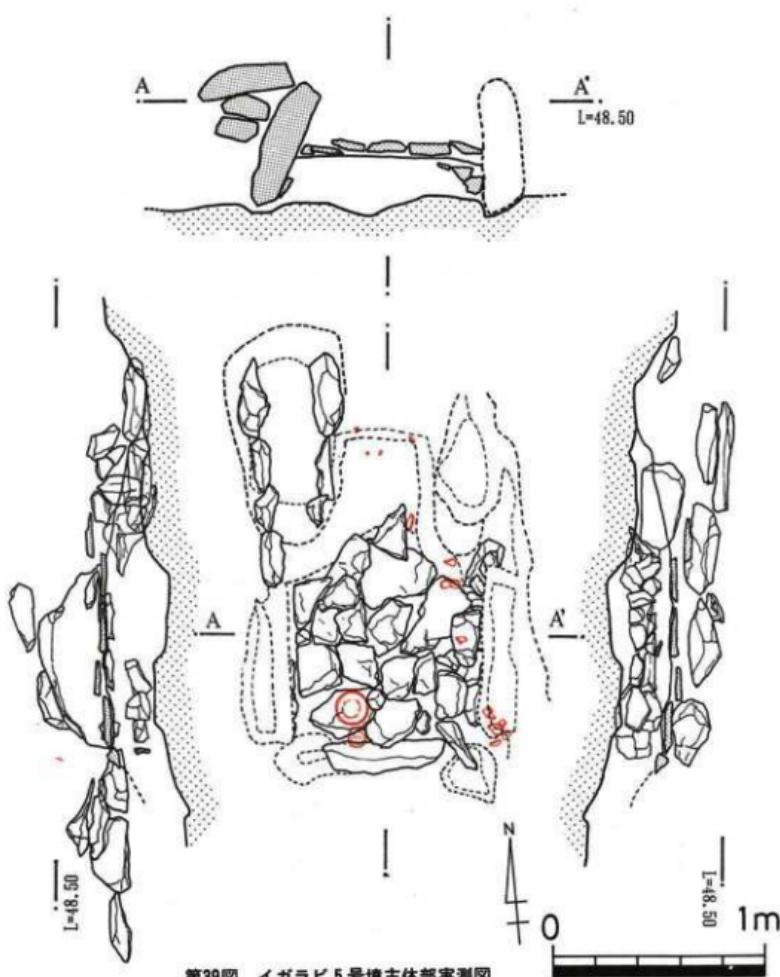
主体部 天井石、奥石、側石の一部は既になかった。遺存するのは西側の側石が一枚と、



第37図 イガラビ 4号墳主体部掘り方実測図



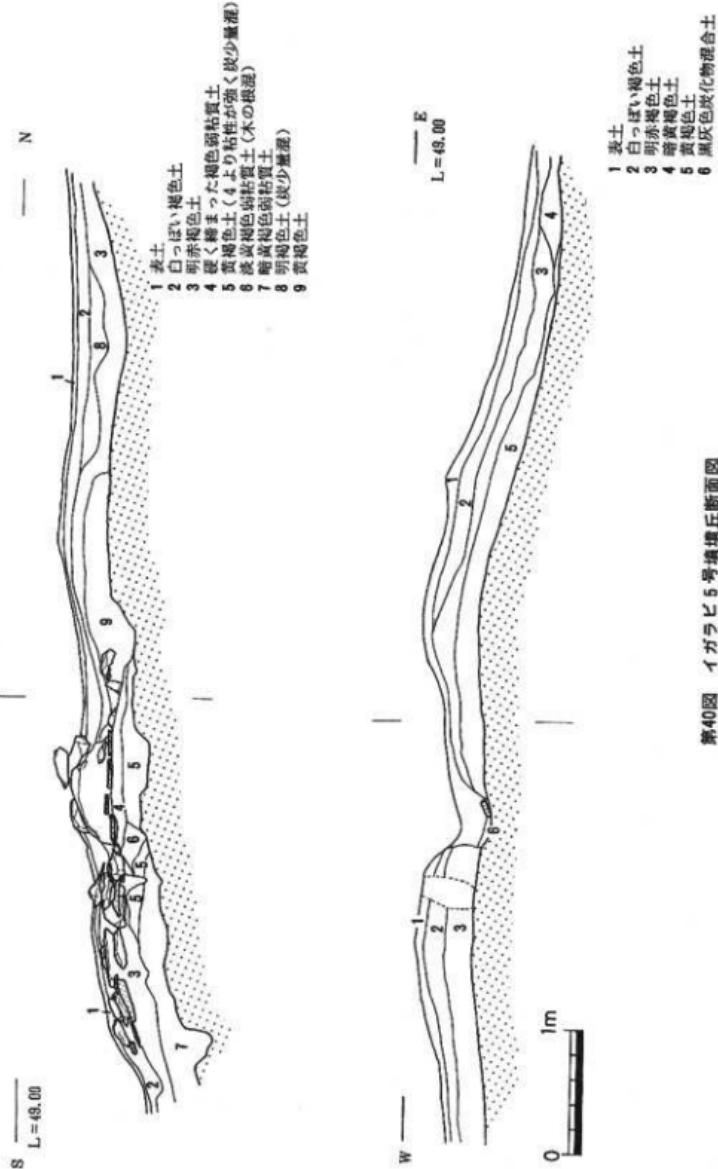
第38図 イガラビ 4号墳出土遺物実測図 1/2



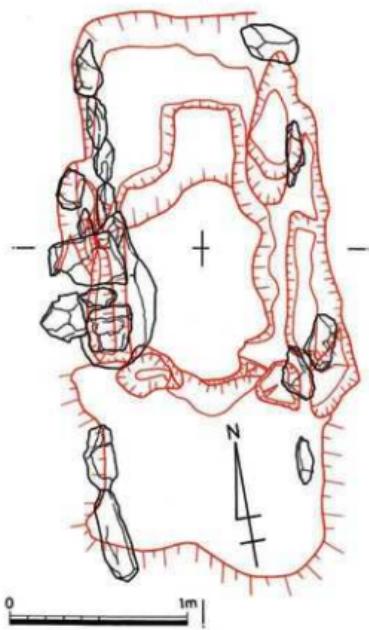
第39図 イガラビ5号墳主体部実測図

これを石室の内外面から補強したと見られる詰め石、及び床面の石である。

西側の側石は横幅0.8m、縦幅0.6m、厚さ18cmを計る隅丸三角形の大きなものである。さらにこれを外側から補強する形で、盛土中に30×40cm、厚さ14cmの石をはじめとする石の重なりが認められた。この側石の北側には、後世に作られたと見られる焼土壙があり、側石及び掘り方は検出出来なかった。石室の東側では、横幅83cm、厚さ17cm程度の掘り方を検出したが、これは抜き取られた側石のものと考えられる。



第40図 イガラビ 5号墳横断面図



第41図 イガラビ 5号墳主体部掘り方実測図

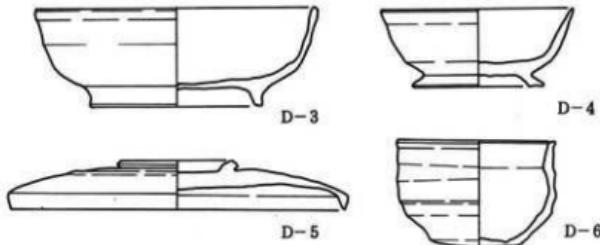
さらに、この堀り方の北側には連続して堀り方が検出されたが、これも抜き取られた側石の堀り方と見られ、この側石は推定で横幅80cm、厚み15cm程度のものと考えられる。

この二つの側石に挟まれた東西幅0.9m、南北長1.5m、地山からの厚み30cmの凸状の基盤に20枚の床石が敷かれている。床石は偏平な20×25cm、厚み5cm大のものである。一部の床石は側石の際に密着し、さらに他の床石と重なり合っているが、概ね平坦な床面を保持している。床石の中でも特に長さ60cm、幅15cm、厚み9cmの細長い石が、側石と直角に据えられていた。この石は本丘陵上の他の主体部においても共通して見られるので、横穴式石室の玄室と羨道部を区画する樋石と考えられる。

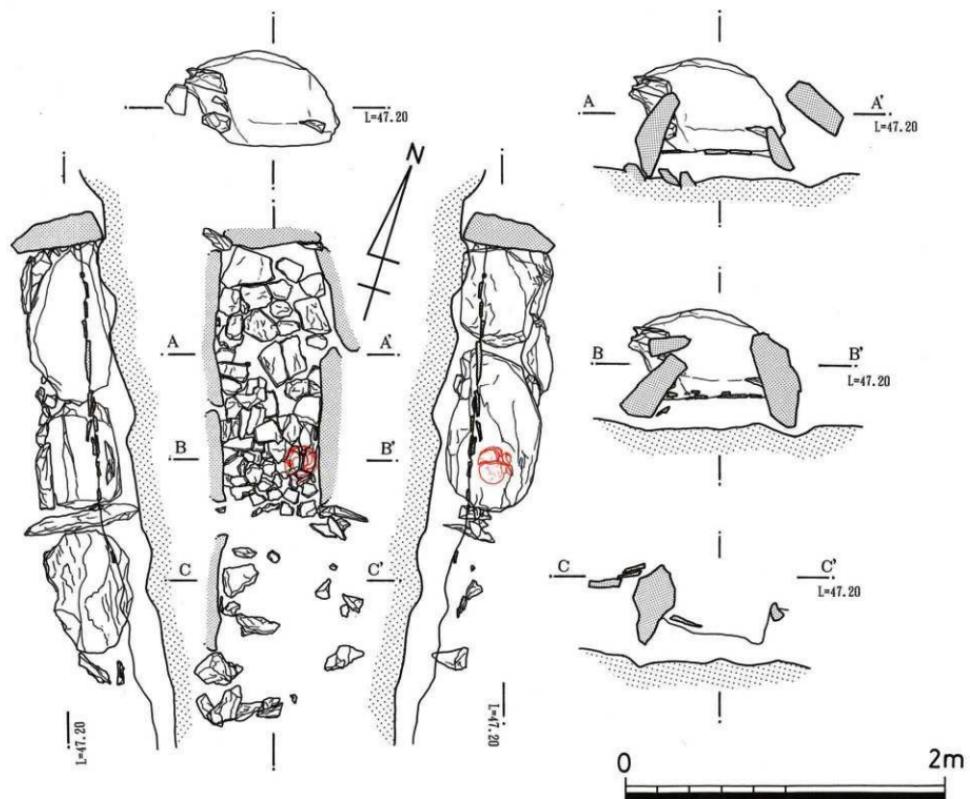
床面基盤の東側面で大小14個、西側で3個の石を埋め込んでいるのが検出された。これらは、側石を掘り据える際に床面基盤を補強する目的で施された石組みと考えられる。

以上のことから、本古墳の主体部は、奥壁1枚と東・西側の側石が2枚づつの計5枚の腰石で構成されていた横穴式石室と考えられる。上部の構造と天井石の有無は不明である。

出土遺物 石室内の遺物は高台付杯（D-03）と碗（D-06）である。共に4cmほど床面

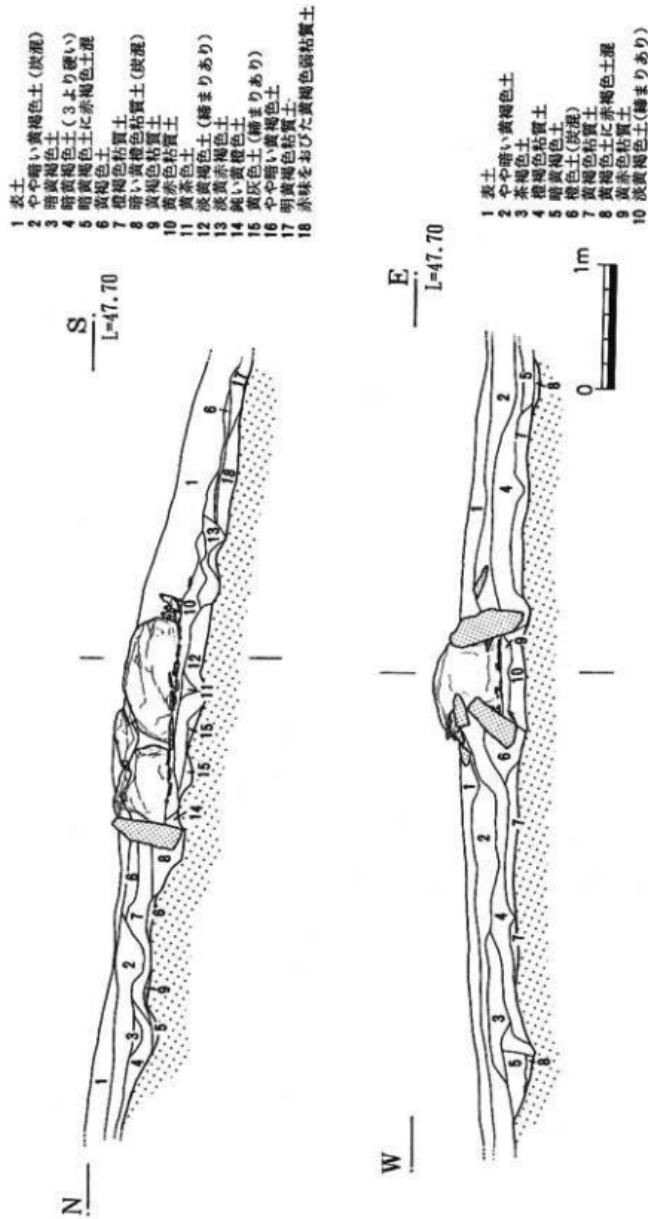


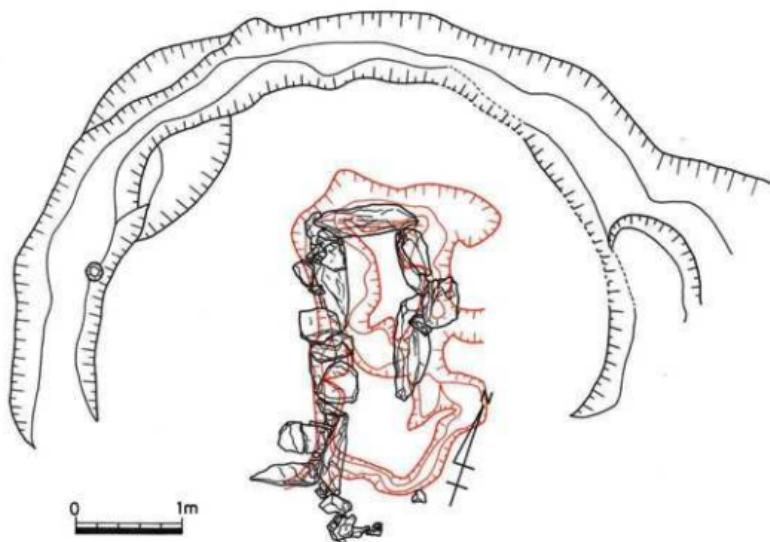
第42図 イガラビ 5号墳出土遺物実測図 1/2



第43図 イガラビ 6号墳主体部実測図

第44図 イガラビ6号填埋丘断面図





第45図 イガラビ 6号墳 墓掘り方実測図

から浮いて検出されている。D-03は口径14.6cm、器高4.3cmで、底部外面に回転糸切り痕がわずかに見られる。D-06は口径8.0cm、器高5.6cmで口縁部がわずかに外反するものである。口径に比較して器高の高い椀状の壺で、底部も笠切りによる切り放しの後ほとんど調整が見られず平底に近いものである。

石室内の堆積土中からは高台付壺（D-04）と、受部を持たない輪状つまみの蓋（D-05）が出土している。

その他の遺構 調査前に墳頂部でみられた産みは、前述のとおり、 0.5×1.0 m、深さ14cmの小形の土壤となった。ここで用いられた石は7個であるが、何れも部分的に焼けており、埋土も灰や炭を多く含んだものであった。遺物はなかった。側石の一部を抜き取った後、これを利用して埋葬用の土壤を新たに作ったものと考えられるが、遺物がなく時期は不明である。

8. イガラビ 6号墳

位置と現状 6号墳は、4～8号墳群の中で最も東よりに位置した古墳である。標高は47.40

mを計る。測量によれば、南北6m、東西約4m、高さ0.5mの略方形墳で、盛土をほとんど流失していると推定された。墳丘中央部から南側には、石材がかなり露出しており、当初はこれら的一部が組合せの石棺であろうと思われた。

墳丘 調査の結果、墳丘は東西長5.30m、南北長5.05m、高さ0.5mを計った。墳丘の基盤は、丘陵斜面を約20cmほど削平して平坦を作ったのち、石室床面が水平となるようにして淡黄褐色～黄褐色土を敷いて叩き詰めた後、盛土したものと推定される。南側を除く三方には周溝が巡っていた。この周溝は、北側で深さ15～20cm、上端幅60～70cm、溝底幅10～30cmを計る。墳丘中央部には南北に長軸を向けた小型の横穴式石室が遺存していた。

主体部 石室の主軸方向はN18°Wで、長さ2.80m、幅1.10mの長方形を呈している。北側に奥壁石1枚、東側石2枚、西側石4枚が遺存しており、東側石の南端部は残っていないかった。石室の内側は、南側半分は床面が欠落しており、北側では側石が土圧により内側に傾いて床面を押し潰し、敷き詰められていた床石が動いて重なりあっていた。床面は北側で10cm、中央部で20cm程度土砂を敷き詰めている。

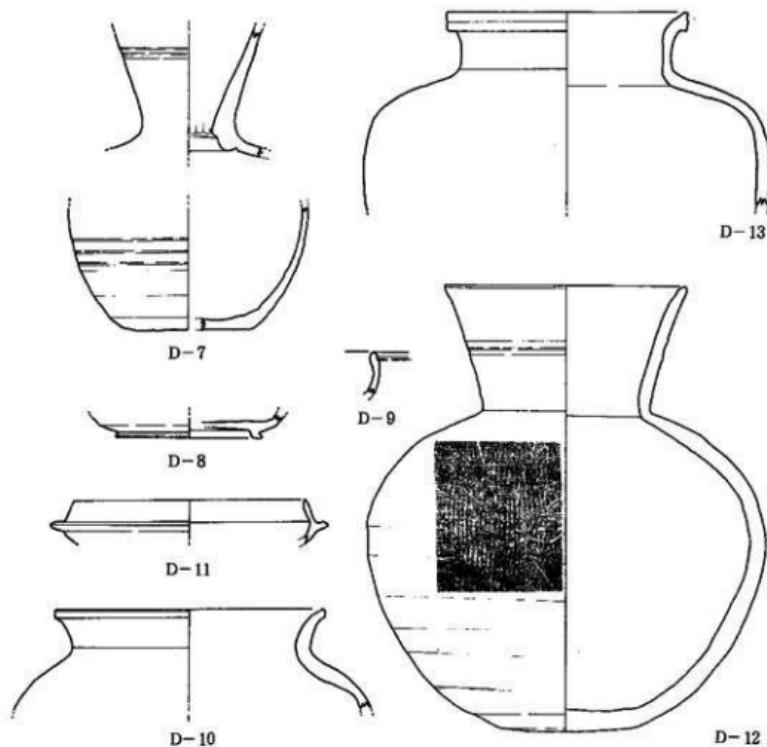
奥壁及び側石の掘り方は、北側では地山から直接掘り込んでいるが、南側ではその上層の黄褐色粘質土から地山まで掘り込まれていた。東側と西側の掘り込みは僅かであるが、北側では大きく広く掘り込まれていた。奥壁と側石を固定するための裏込めの石は、西側北端部分だけを見られた。

側石の積み方は、側石の上に20～40cm程度の平石がところどころに見られる。従って、側石上に少なくとも一段の積み石を施した後、蓋をして盛土をしたものと思われる。

出土遺物 石室内からは、須恵器の完形の壺（D-12）と、坏身の小破片（D-11）が出土している。D-12は石室東側の側石の敷石上に正立した状態で検出された。口径12.6cm、器高23.3cm、頸基部径8.8cm、体部最大径20.8cmを計る。胎土は密、焼成は良好で、口頸部内外面及び肩部外面に緑色～灰褐色の自然釉がかかる。口頸部には浅い沈線が二条巡り、回転ナデが施されている。体部外面には平行叩きが施され、内面には円弧押当具痕が残る。

D-11は西側石の敷石上から検出された。立ち上がりから受部にかけての一部が残存する。推定口径12cm、立ち上がり高1.3cm、現存高2.3cmを計る。胎土は密、焼成は良好で灰褐色を呈している。

他に周溝埋土中より、長頸壺の頸部（D-07）と底部、高台付坏の底部（D-08）大型



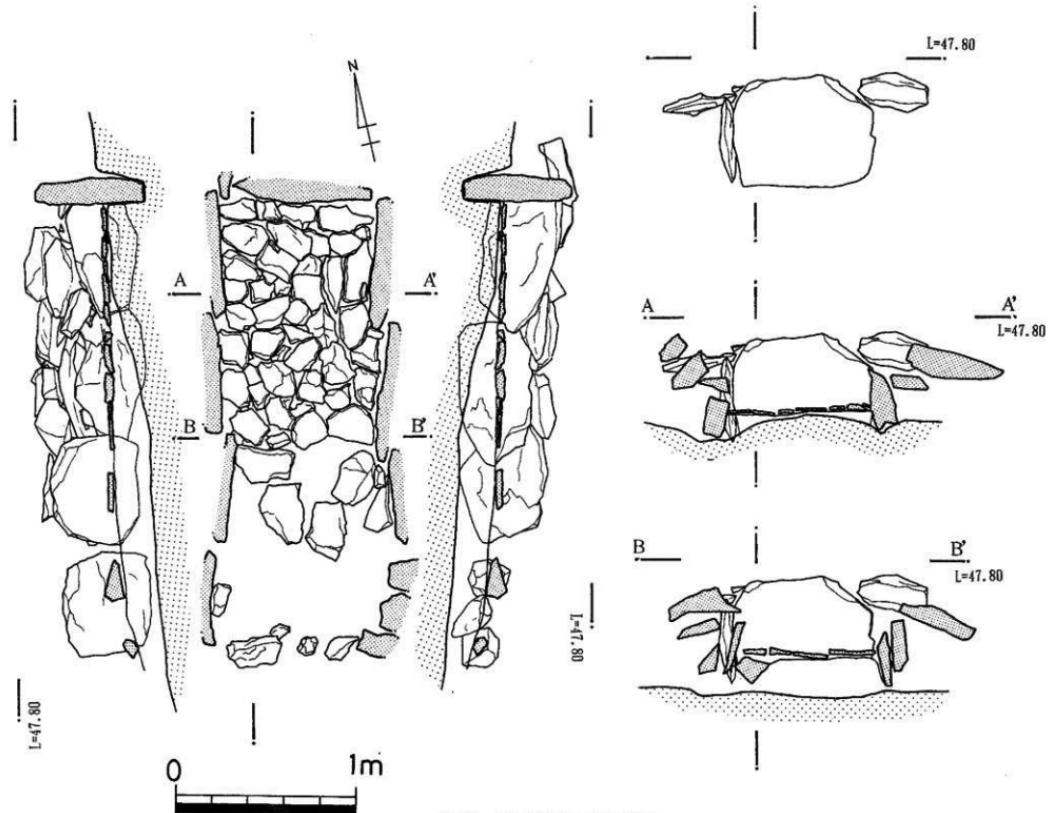
第46図 イガラビ6号墳出土遺物実測図 1/6

の壺片（D-10）、口縁部に沈線のある杯身片（D-09）等が出土している。

9. イガラビ7号墳

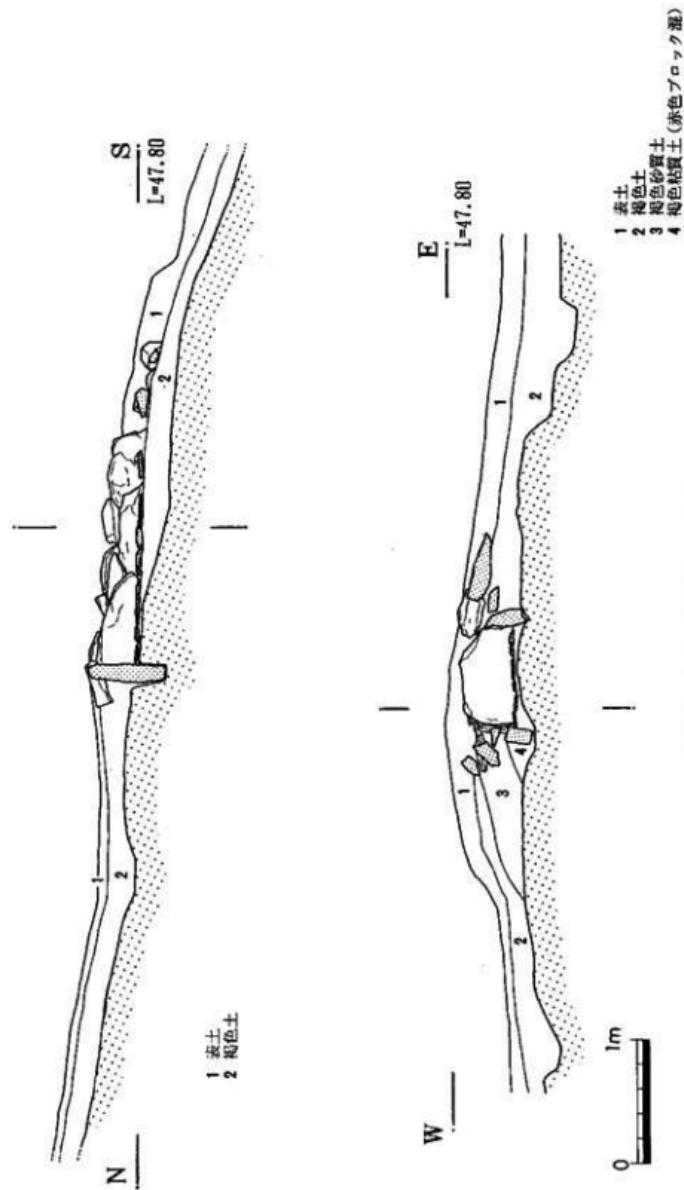
測量時点では、4号墳の南東側約7mのところの緩斜面上に石材が点々としており、それらが石棺の一部と思われたので、7号墳と呼称した。

調査に入り表土を除去したところ、それらの石材が意図的に配石された様子はなかったので古墳ではないと考えていた。しかし、5号墳の調査中に南側墳裾部のところで円弧状に掘り込まれた地域が認められたので、これを周溝と判断して新たに7号墳と呼称したも



第47図 イガラビ8号墳主体部実測図

第48図 イガラビ8号堆積丘断面図



のである。

本古墳は主体部の石材は全く検出されず、遺物も出土しなかった。しかし、8号墳の周溝に削平されている墳丘基盤の東側から、主体部と思われる側石の堀り方が検出された。この堀り方の北側では、地山を垂直に切削加工して掘り窪め地山をほぼ水平にしていたと思われるが、南に下がるにつれ後世の擾乱がひどく、構造、墳丘の規模とも不明である。北側には周溝を有している。

本古墳は、破壊がひどく主体部の構造の確認は出来なかったが、周囲の古墳と墳丘基盤の規模は同程度であったと推定されるので、同じく小型の横穴式石室を有していた可能性があると考えられる。

出土遺物がなく、構築された時期を特定することは出来ないが、8号墳の周溝に墳丘基盤を削平されている状況から、8号墳の構築時期よりも古いものと思われる。

10. イガラビ 8号墳

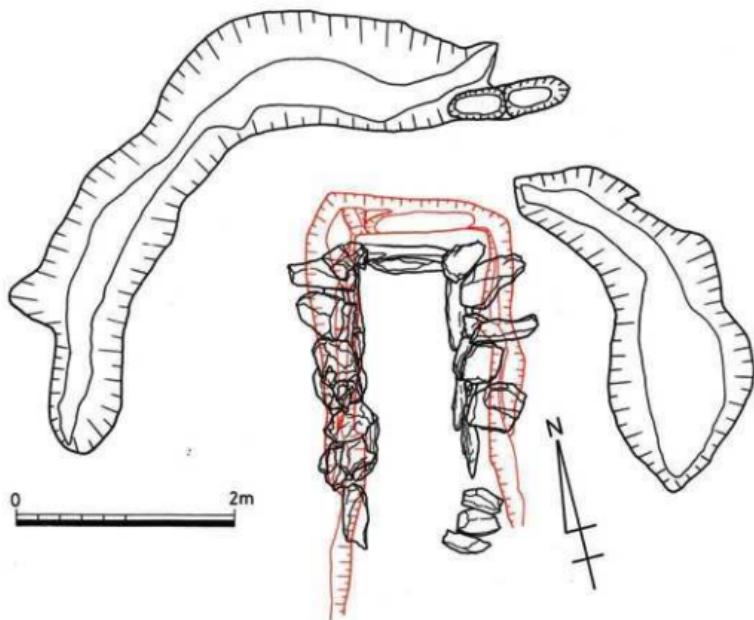
位置と現状 イガラビ 8号墳は、4号墳の南斜面下10mのところに位置する。標高は、墳頂部で47.7m。墳丘の高さは0.8m、南北長7.0m、東西長5.5mを計り、中央部には小型の横穴式石室が遺存していた。

墳丘 主体部を構築するにあたって、斜面の南側（低い側）に褐色土を埋めて平坦面を作っている。側石を据える際に、主体部の北側では地山面を掘り込んでいた。掘り込みは、東西側では僅かであったが、北側においては石の高さを揃えるために、約30cm掘り下げている。主体部の南側においては、埋めた褐色土の上に側石を据えていた。

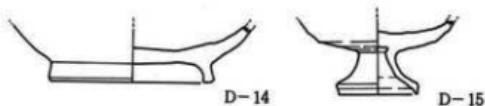
側石の外側には、石を固定するための詰め石が東側に1個あるだけで、褐色の粘質土を最下層として順次、褐色砂質土、明褐色土、褐色土等を積み上げ盛土としている。

南側を除く三方に、幅約30~60cm、深さ最大20cmの周溝が巡っていた。この周溝は上部北東で一度途切れている。

主体部 石室は、南北長2.6m、東西幅0.9mの長方形を呈する。東側に3枚、西側に4枚の側石、及び北側奥壁1枚の計8枚が遺存しており、それらには高さ40~50cm、厚さ5~10cmの扁平な大石が使用されていた。奥壁と西側石の間には、高さ50cm、幅20cm、厚さ10cm



第49図 イガラビ 8号墳主体部掘り方実測図



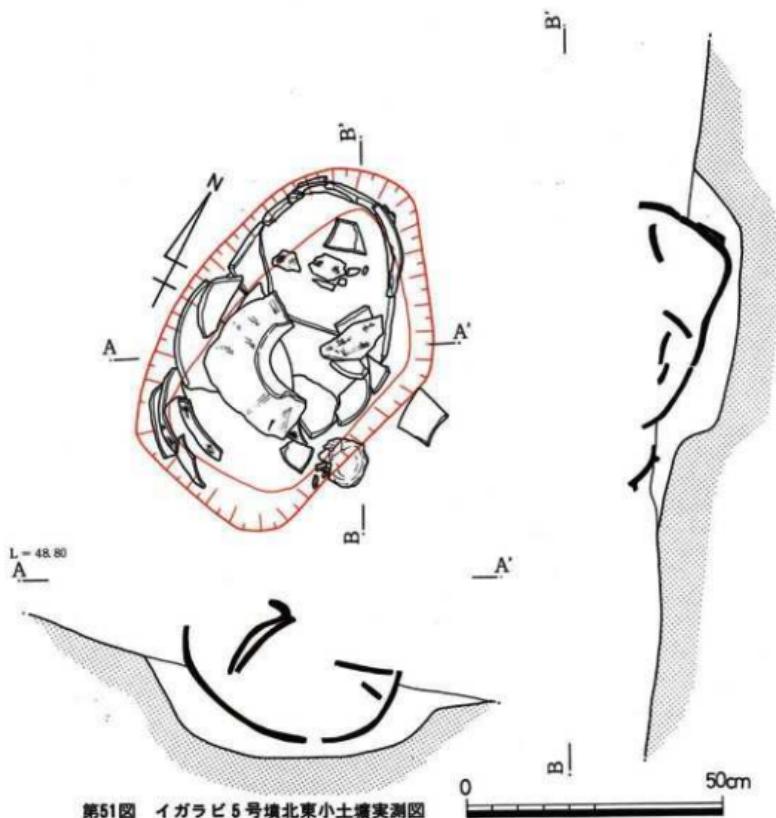
第50図 イガラビ 8号墳出土遺物実測図 1/2

の偏平な石が隙間を埋めるように据えられていた。蓋石は全く遺存していなかった。

尚、東側の南端には側石ではなく、30cm程度の角石が並んでいた。側石があったと思われる跡もなかったので、幾つかの石を積み上げて、側石の代わりとしていたのではないかと思われる。

側石の上には、10~50cm程度の積み石が東側で1~2段、西側で2~3段遺存しており、残存高は床面から30~45cmであった。

出土遺物 遺物は石室内には全く遺存していなかったが、主体部の南側斜面より低脚壺（D-15）と高台付壺（D-14）が出土しており、これらの遺物は本古墳に関係あるもの



第51図 イガラビ5号墳北東小土壙実測図

と思われるが断定は出来ない。いずれも一部欠損しているが、低脚壺は脚部径4.3cm、脚高2.3cmを計る小型のものである。高台付壺は底部に静止糸きりの後、回転ナデ調整を施した痕が残っている。

その他の遺構 この他、イガラビ5号墳北東5m地点で、甕（G-65）を埋納したと見られる小土壙が検出された。

本土壙は東西46cm、南北70cm、最深部で12.5cmの略方形を呈するものである。

埋納されていた甕（G-65）は口縁20cm、器高55.6cmを計る。器形は肩部が強く張り、胴下部がわずかにくびれるもので、底部に6片の焼台と思われるかえりのある杯蓋片・甕片が容着している。容着した須恵器片の特徴から、本埋納壙が古墳群に関連して作られた

ものか、後世に行われた何らかの祭祀に使用されたものか判断出来なかった。

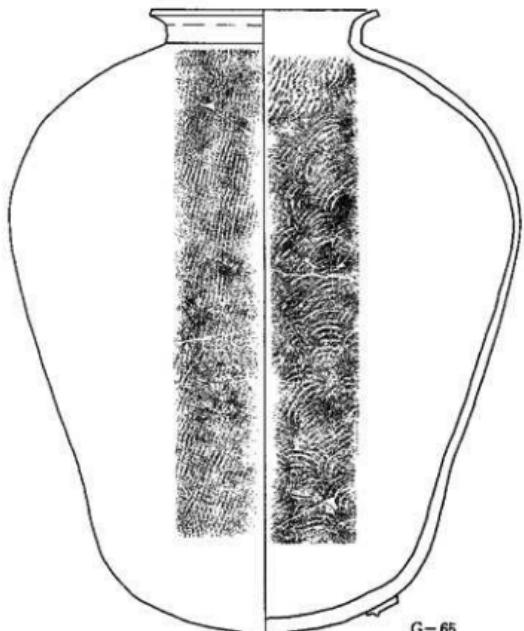
11. イガラビ 4~8号墳周辺で出土した遺物について

イガラビ 4~8号墳の所在する丘陵上にも発掘した全域にわたって遺物が散布していた(第53図)。それらの遺物の散布密度も一律で総数は約1000片にものぼった。特に高台付抔片が50%以上の高い

比率で発見された。復元実測出来たものはそのうちの70点で、大部分は細片であった。
抔蓋 輪状つまみを有する蓋はほとんどである。かえりの付くものは少なく、天井部が張った器高の低いものが多い。G-8は口径15.0cm、器高2.6cm。G-37は口径13.2cm、器高2.2cm。いずれも天井部内面に静止ナデ、外面のつまみ付近は箒削り、他は回転ナデにより調整するものである。つまみは外側を箒削りで、内側は指頭によって押しつぶめて作り出していると思われる。

高台付抔 本遺跡群内の他地区に類似の高台付抔は(口径/器高が3:1以上のもの)はG-1(口径10.2cm—器高3.9cm)・5(12.0—4.7cm)・53(14.8—5.1cm)等わずかであって、他はG-12(口径18.2cm—器高2.9cm)・41(19.2—3.4cm)・18(19.8—3.6cm)等器高が低く口径が大きくなるものが多い。更に、高台部が角張って低いかなり画一性が高い印象を持つ台付長頸壺と思われる底部片も出土している。

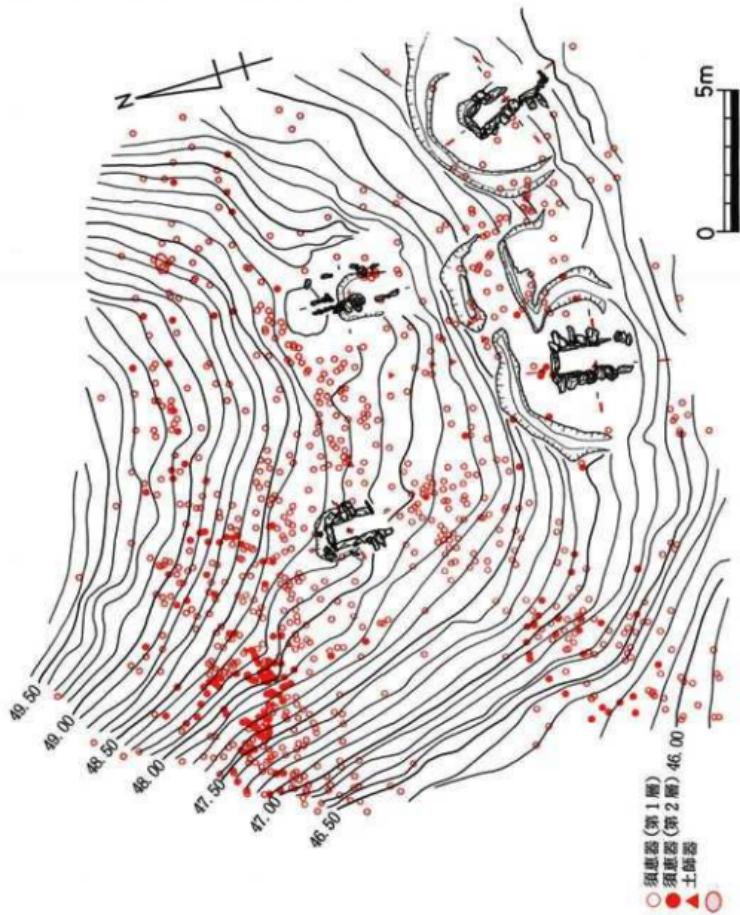
平底抔 平底の抔もかなりの頻度で検出されたが、いずれも底部外面に回転糸切り痕を有



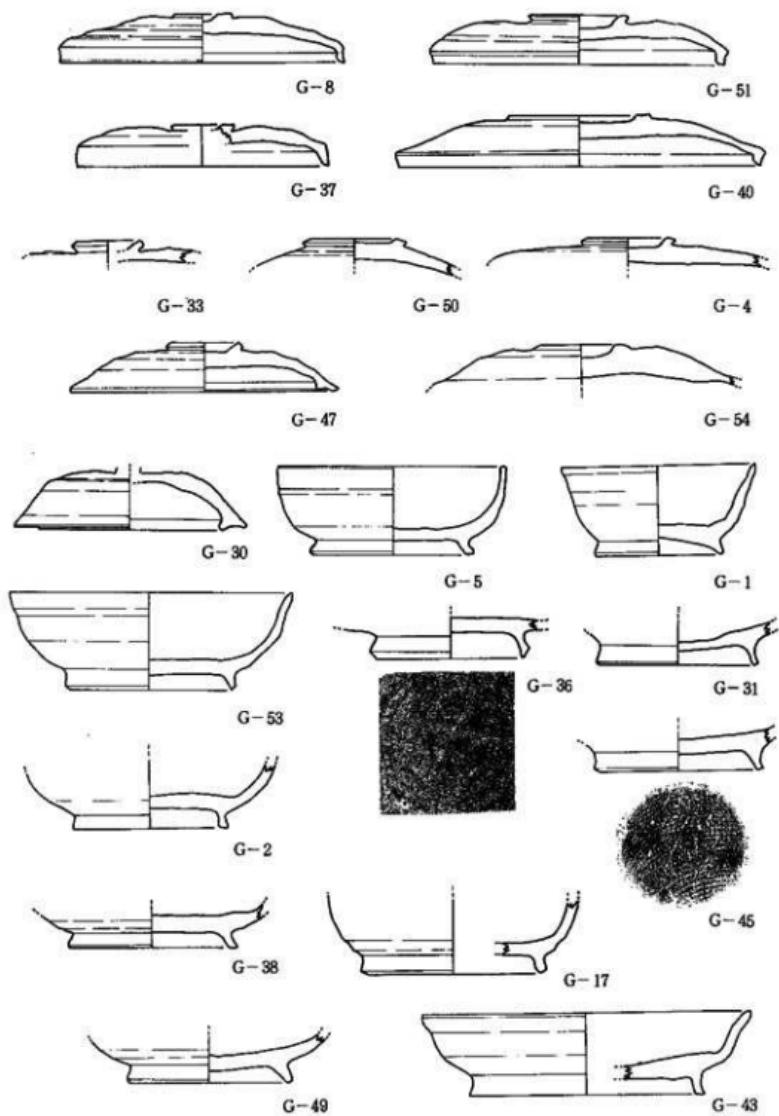
第52図 イガラビ 5号墳北東小土壙内大甕実測図 1/2

している。坏部の形状も底部から直線的に開いていくものも見られ、時間的な幅をもっているように思われる。この中で特にG-56・57は底部から直線的に開く坏部をもっている。底部外面に回転糸切り痕を有し内底面を静止ナデで調整する技法は、池ノ奥6号窯の床面上で検出された平底坏やわずかな削り出しの高台を持つ坏片と同様である。

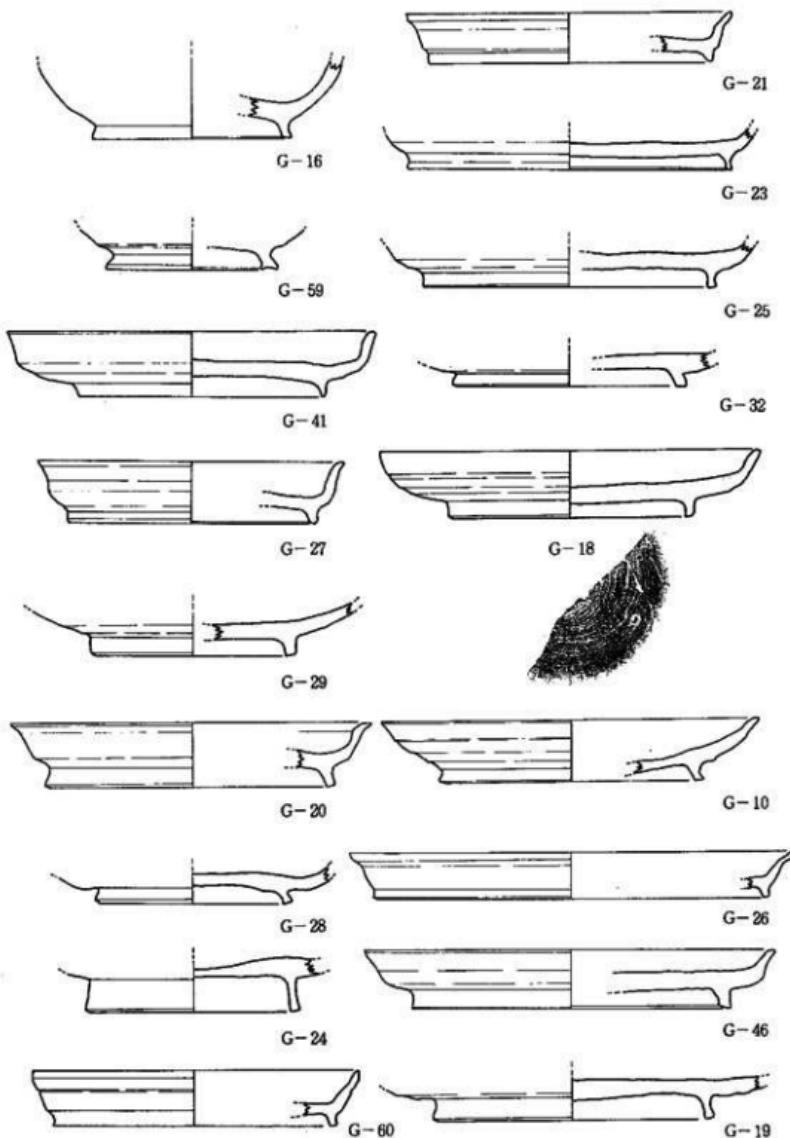
その他の遺物 台付長頸壺の底部と思われるもの(G-62・63)、鉢(G-64)、鍋(G-66)、高坏(G-55)、罐(G-44)、短頸壺(G-39・48)等が出土している。短頸壺の口縁部



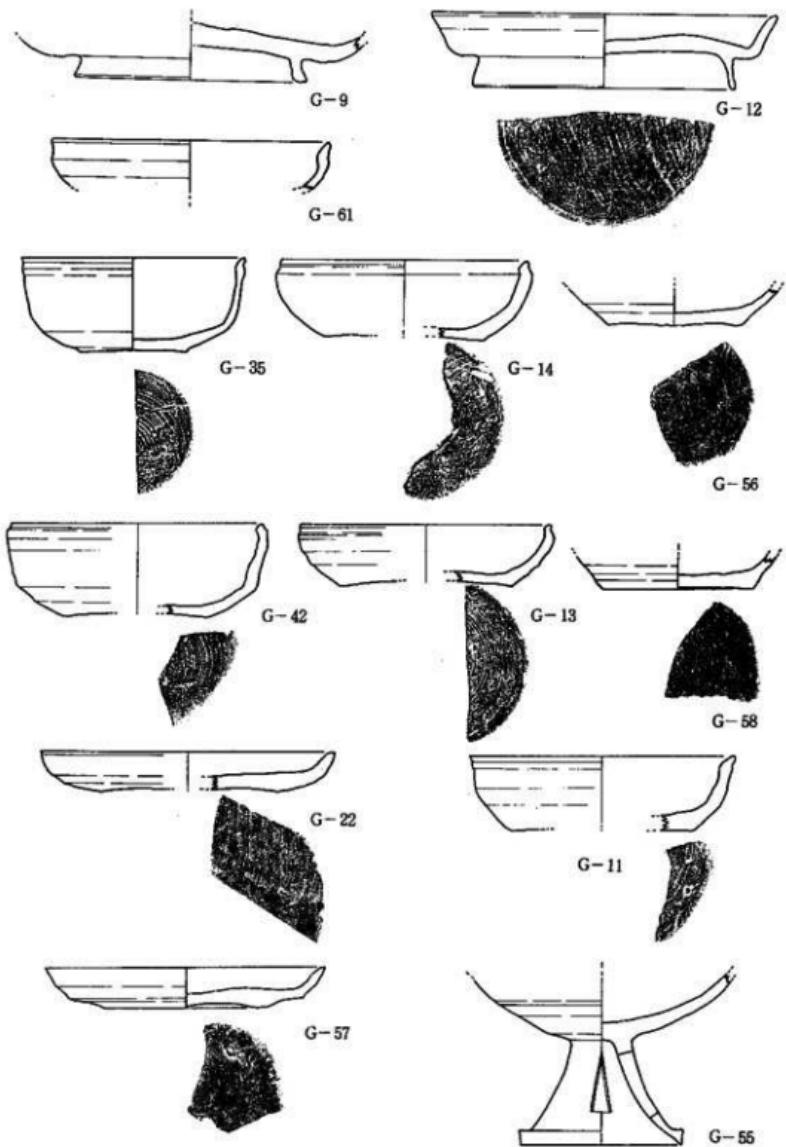
第53図 イガラビ4～8号墳遺物出土状況図



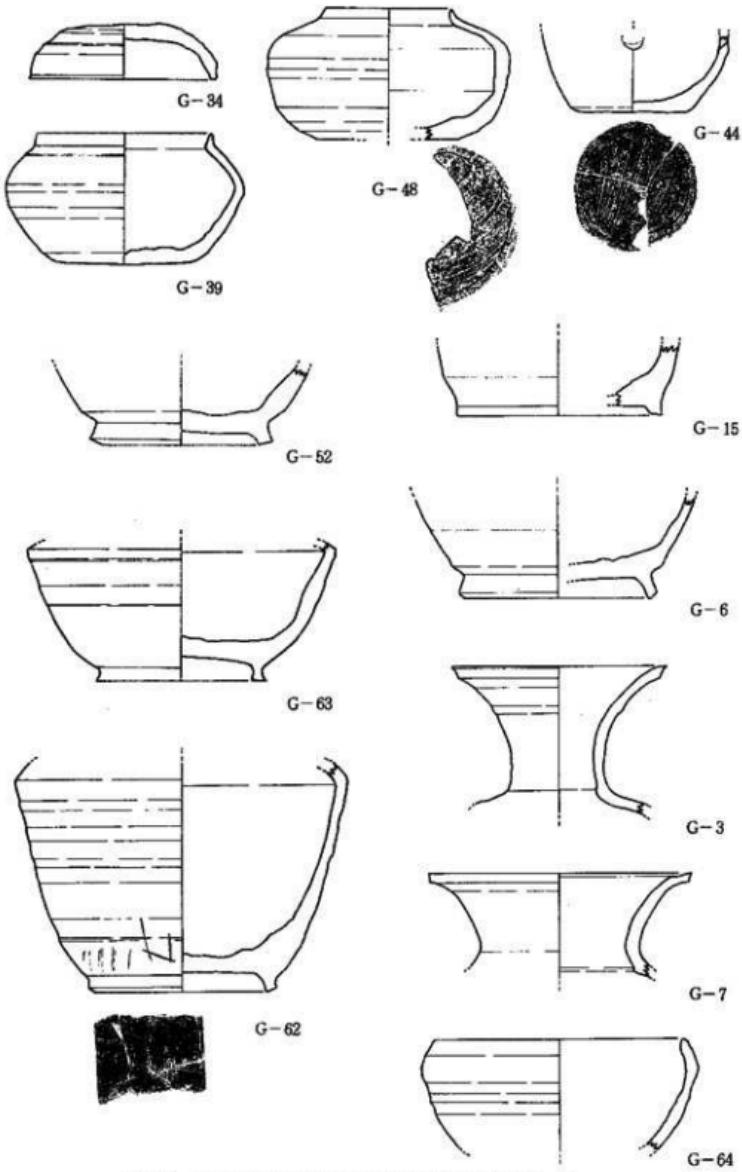
第54図 イガラビ4～8号墳周辺出土遺物実測図(1) 1/4



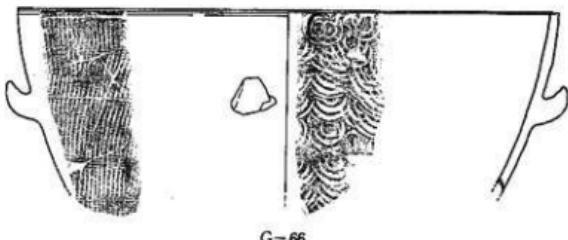
第55図 イガラビ4～8号墳周辺出土遺物実測図(2) 1/4



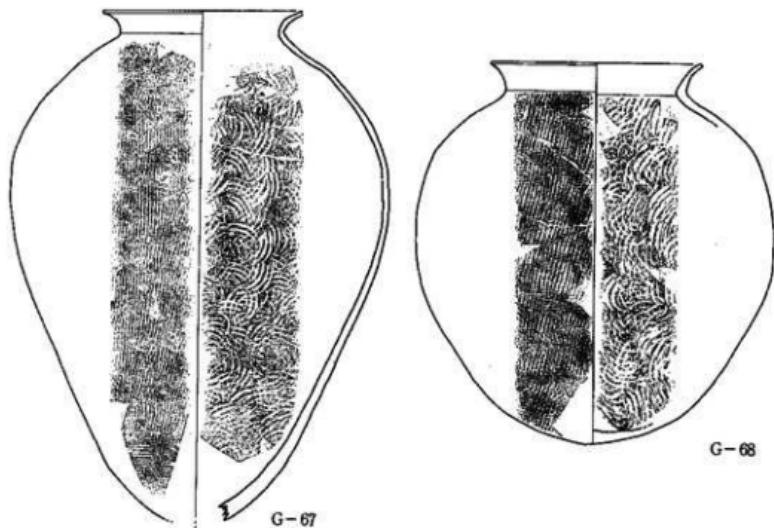
第56図 イガラビ4~8号墳周辺出土遺物実測図(3) 1/2



第57図 イガラビ4～8号墳周辺出土遺物実測図(4) 1/2



G-66



G-68

第58図 イガラビ4～8号墳周辺出土遺物実測図(5) 1/6

には蓋を置て焼成したと思われる痕跡が観察された。このうちG-39は5号墳と8号墳の中間地点から出土したものであるが、口径と自然釉の状況からこの短頸壺の蓋とみられるG-22は、10m以上も離れた4号墳の北側の丘陵斜面から出土しているのは興味深い。

また、小型丸天井型のつまみを有しない杯蓋は一片もなかったことが特徴的である。

これほど大量の土器がどうして持ち込まれ何に使用されたものであるか不明であるが、4～8号墳を含めた一定の地域を、ある種の神聖な地域であったと認識するならば、これらの遺物は占墳群形成時とその後の祭祀に関係したものとも考えられる。

第5表 イガラビ4~8号墳出土遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
D-01	4号1区表土下(褐色土)	罐	11.1	8.85	平底。範記号。
D-02	4・5号墳間	平底环	12.9	4.4	静止糸切り痕
D-03	5号(5-1)	高台付环	14.6	4.3	静止糸切り痕
D-04	5号	高台付环	10.0	2.8	小型の蓋が高台代わり
D-05	5号	环蓋(輪状つまみ)	17.4	2.6	受部のない輪状つまみの蓋
D-06	5号(5-4)	罐	8.0	5.6	
D-07	6号4区第2層	長頸壺			平底
D-08	6号4区第2層	高台付环			
D-09	6号4区第2層	环身			口縁部に沈線
D-10	6号4区第2層	壺	14.0		
D-11	6号4区第2層	环身	12.1		立上がり1.3、角度29.5°。水平方向。
D-12	6号4区第2層	蓋+壺	12.6	23.3	
D-13	6号4区第2層	壺	12.6		
D-14	8号南竈	高台付环			静止糸切り痕
D-15	8号南竈	低脚环			

第6表 イガラビ4~8号墳周辺出土遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
G-01	4-1-29	高台付环	10.2	3.9	
G-02	4-1-29	高台付环			
G-03	4-1-4	長頸壺	11.2		口縁~頸部のみ
G-04	4-2-14	环蓋(輪状つまみ)			焼部不明
G-05	2(4-3)・22(4-2)	高台付环	12.0	4.7	
G-06	4-4-25	高台付長頸壺			
G-07	4-4-7	壺	13.8		口縁部のみ
G-08	4-1-26・74・405	环蓋(輪状つまみ)	15.0	2.6	受部のないもの
G-09	14(4-4)・679(4WN)	高台付环			高台部のみ。静止糸切り横
G-10	328(4WN)	高台付环	19.8	3.3	
G-11	799(4WN)	平底环	13.8	4.0	
G-12	729(4WN)	高台付环	18.2	2.9	静止糸切り痕
G-13	701(4WN)	平底环	13.2	3.3	

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
G-14	708-3(4WN)	平底壺	12.8	4.1	端部がくびれるタイプ。静止糸切り痕
G-15	704(4WN)	高台付長頸壺			
G-16	710(4WN)	高台付壺			
G-17	353(4WN)	高台付壺			
G-18	355+680(4WN)	高台付壺	19.8	3.6	
G-19	735(4WN)	高台付壺			
G-20	708-1(4WN)	高台付壺	21.4	3.4	
G-21	708-2(4WN)	高台付壺	26.0	2.6	
G-22	704(4WN)	平底壺	15.4	2.1	
G-23	729(4WN)	高台付壺			
G-24	732(4WN)	高台付壺			
G-25	697-699(4WN)	高台付壺			
G-26	697(4WN)	高台付壺	20.4	2.2	
G-27	474(4NW)	高台付壺	16.0	3.3	
G-28	464(4NW)	高台付壺			
G-29	440(4NW)	高台付壺			
G-30	494(4NW)	壺蓋(擬宝珠つまみ)	9.6		受部のみ
G-31	782(4NW)	高台付壺			
G-32	756(4NE)	高台付壺			
G-33	5号墳墳丘表土中	壺蓋(輪状つまみ)			端部不明
G-34	127(5-1)	壺身	9.8	2.9	B-39の蓋(自然輪がぴったり!)
G-35	138(5-1)+784(5NW)	平底壺	11.6	5.0	口縁端部がくびれるタイプ
G-36	150(5-2)	高台付壺			
G-37	5-2-1-5-2-20-120(5-2)	壺蓋(輪状つまみ)	6.6	2.2	
G-38	5-3-15(5-3)	高台付壺			
G-39	5-3-15	有蓋短頸壺	9.0	6.9	
G-40	113+116(5-3)	壺蓋(輪状つまみ)	19.0	2.7	
G-41	136+176(5-4)	高台付壺	19.2	3.4	
G-42	134+162+171(5-4)	平底壺	13.0	4.9	端部に沈線によるくびれ。静止糸切り痕
G-43	172+175(5-4)	高台付壺	17.2	4.3	
G-44	137+524(5-4)	壺			
G-45	157(5号墳周辺)	高台付壺			糸切り痕

番号	地図・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
G-46	770(5NE)	高台付坏	21.4	3.1	
G-47	578(5NE)	坏蓋(輪状つまみ)	14.0	2.6	
G-48	5-2-17-523-619-621-625 他	有蓋短頸壺	6.4	6.9	
G-49	39(7-1)	高台付坏			
G-50	179(7-1)	坏蓋(輪状つまみ)			
G-51	50-182(7-1)	坏蓋(輪状つまみ)	15.2	2.6	
G-52	189(8-3)	高台付長頸壺			
G-53	228(8-4)	高台付坏	14.8	5.1	
G-54	4-1-29-89-90-94(4-1)	坏蓋(輪状つまみ)			
G-55	8号墳第4区第2層	高坏			
G-56	695(4WN)	平底坏			
G-57	736(4WN)	平底坏	14.6	2.1	回転糸切り痕
G-58	722(4WN)	平底坏			回転糸切り痕
G-59	721(4WN)	高台付坏			高台を小形の坏蓋で代用するもの
G-60	725(4WN)	高台付坏	16.8	2.9	
G-61	797(4WN)	坏身	14.4		口縁のくびれるタイプ
G-62	4WN-4-45-45-3-15他	台付壺			
G-63	4-4-70-76-77	台付壺			
G-64	699-703(4WN)	鉢	13.0		
G-65	5NE	甕	20.0	55.6	
G-66	5NW-5NE	甕		47.0	
G-67	5NE	甕	17.4		
G-68	4号墳周辺	壺	18.4	33.1	

イガラビ1～3号墳全景





イガラビ 1号墳調査前現況



イガラビ 1号墳石室と墳丘



イガラビ 1号墳周溝と
外護列石（北側からみる）



イガラビ1号墳
天井石除去後の状況



イガラビ1号墳
天井石除去後



イガラビ1号墳積み石状況
(奥)



イガラビ 1号墳積み石状況
(左奥)



イガラビ 1号墳積み石状況
(右奥)



イガラビ 1号墳盛土除去後の石組み　(東からみる)



イガラビ1号墳
裏込め石の状態



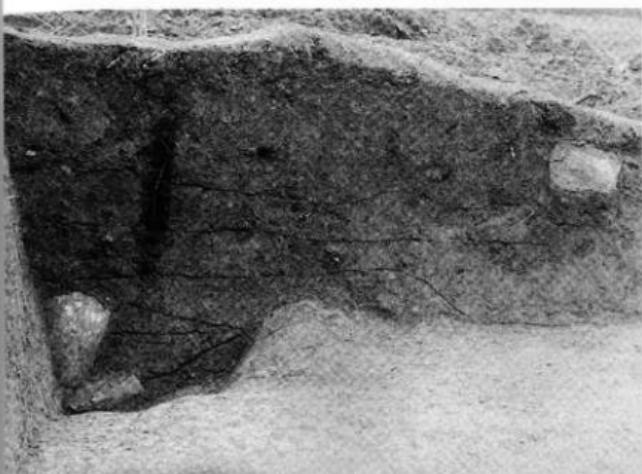
イガラビ1号墳
玄室の石組み



イガラビ1号墳床石の状況



イガラビ 1号墳
石室床面の調査状況



イガラビ 1号墳
西側盛土状況



イガラビ 1号墳
北側の盛土状況



イガラビ1～2号墳間の
周溝内の堆積状況



イガラビ2号墳調査前現況



イガラビ2号墳崩壊状況



イガラビ 2号墳石室と
外縁列石（南からみる）



イガラビ 2号墳墳丘基盤
(北からみる)

イガラビ 2号墳石室の石組み



イガラビ 2号墳床石の状況



イガラビ 2号墳
石室床石の調査状況



イガラビ 2号墳
墳室遺物出土状況



イガラビ 2号墳
周溝内遺物出土状況

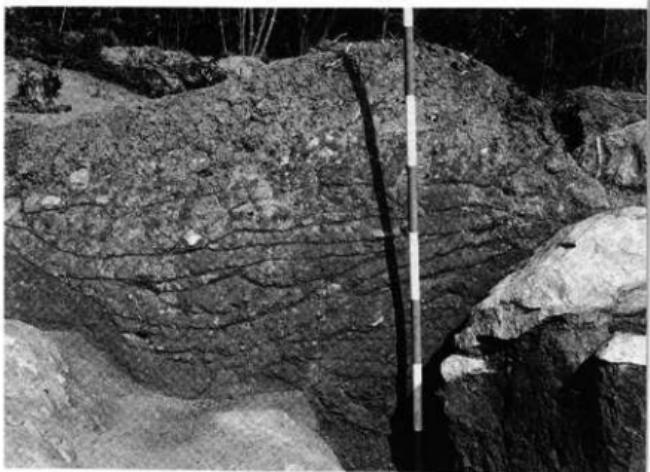
イガラビ 2 号墳
大甕出土状況



イガラビ 2 号墳大甕除去後



イガラビ 2 号墳
北側の盛土状況





イガラビ 2号墳
西側の盛土状況



イガラビ 3号墳墳丘と石室



イガラビ 3号墳主体部と
墳丘（西側からみる）



イガラビ 3号墳
石室内遺物出土状況



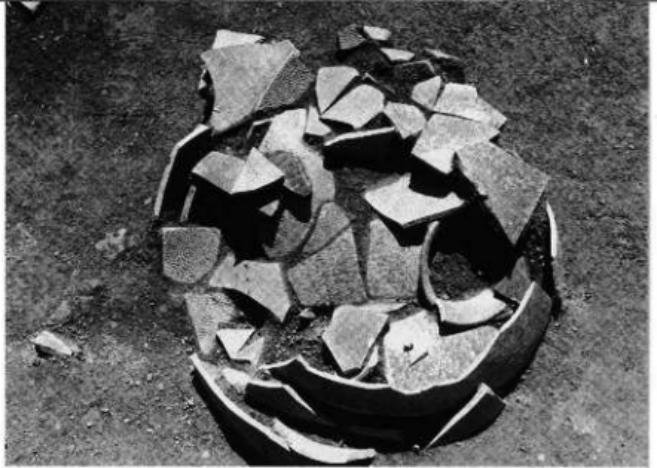
イガラビ 3号墳主体部



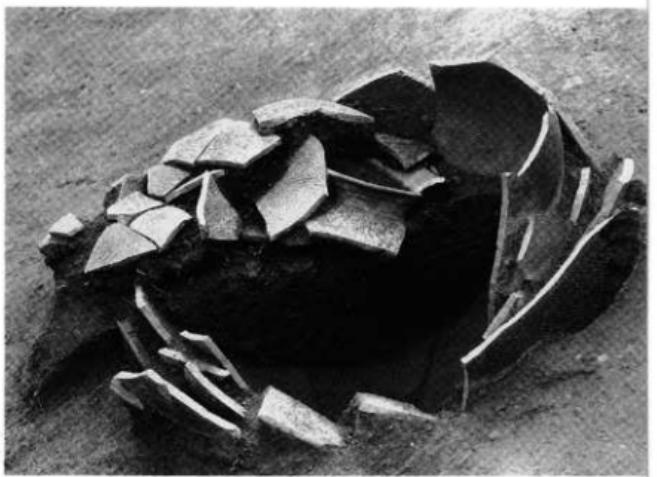
イガラビ 3号墳小口石除去後



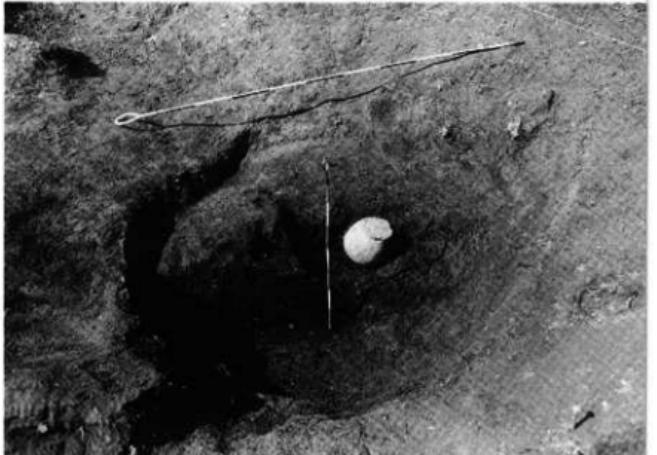
イガラビ 3号墳
調査終了時の墳丘基盤



イガラビ 3号墳
4区大甕土壙



イガラビ 3号墳
周溝付近の土壙



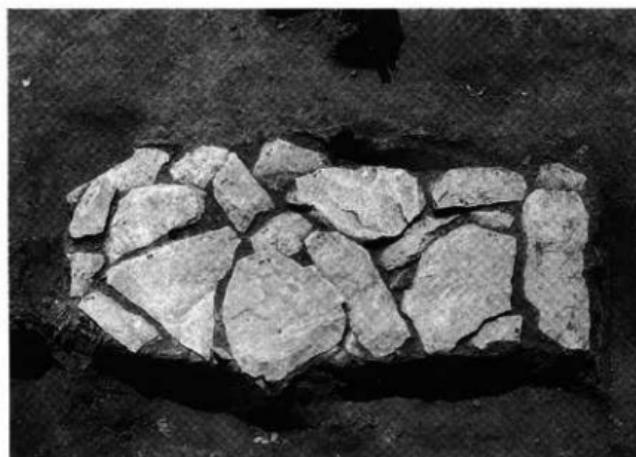
イガラビ 3号墳
焼土壙内遺物出土状況



イガラビ 4号墳主体部①

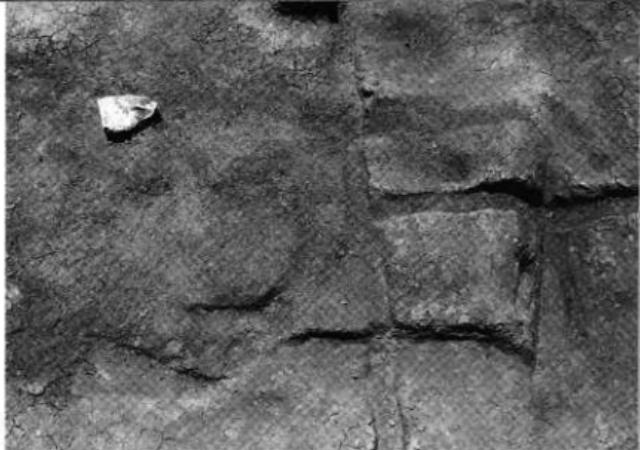


イガラビ 4号墳主体部②



イガラビ 4号墳床石の状況

イガラビ 4号墳
床面調査後の状況

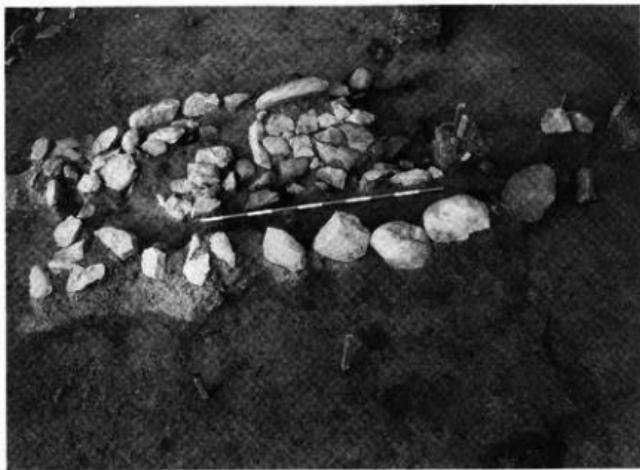


イガラビ 5号墳主体部
(南からみる)





イガラビ 5号墳
主体部内遺物出土状況



イガラビ 5号墳主体部
(東からみる)



イガラビ 5号墳床石



イガラビ 5号墳床面の状況



イガラビ 5号墳
掘り方検出状況